



Sun™ Control Station 2.2

AllStart モジュール

Sun Microsystems, Inc.
www.sun.com

Part No. 819-1417-10
2004 年 12 月, Revision A

コメントの送付: <http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

Copyright 2004 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) は、本書に記述されている技術に関する知的所有権を有しています。これら知的所有権には、<http://www.sun.com/patents> に掲載されているひとつまたは複数の米国特許、および米国ならびにその他の国におけるひとつまたは複数の特許または出願中の特許が含まれています。

本書およびそれに付属する製品は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社書の書面による事前の許可なく、本製品および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

本製品のフォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権法により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

本製品は、株式会社モリサワからライセンス供与されたリユミン L-KL (Ryumin-Light) および中ゴシック BBB (GothicBBB-Medium) のフォント・データを含んでいます。

本製品に含まれる HG 明朝 L と HG ゴシック B は、株式会社リコーがリョービマジクス株式会社からライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。平成明朝体 W3 は、株式会社リコーが財団法人日本規格協会文字フォント開発・普及センターからライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。また、HG 明朝 L と HG ゴシック B の補助漢字部分は、平成明朝体 W3 の補助漢字を使用しています。なお、フォントとして無断複製することは禁止されています。

Sun, Sun Microsystems, AnswerBook2, docs.sun.com, Java, JavaServer Pages, JSP, JumpStart, Netra, Sun Cobalt, Sun Cobalt RaQ, Sun Cobalt CacheRaQ, Sun Cobalt Qube, Sun Fire, および Ultra は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems 社の商標もしくは登録商標です。サンのロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

Netscape および Mozilla は、米国およびその他の国における Netscape Communications Corporation の商標および登録商標です。

OPENLOOK, OpenBoot, JLE は、サン・マイクロシステムズ株式会社の登録商標です。

ATOK は、株式会社ジャストシステムの登録商標です。ATOK8 は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、ATOK8 にかかる著作権その他の権利は、すべて株式会社ジャストシステムに帰属します。ATOK Server/ATOK12 は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、ATOK Server/ATOK12 にかかる著作権その他の権利は、株式会社ジャストシステムおよび各権利者に帰属します。

本書で参照されている製品やサービスに関しては、該当する会社または組織に直接お問い合わせください。

OPEN LOOK および Sun™ Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザーインターフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

U.S. Government Rights—Commercial use. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

本書には、技術的な誤りまたは誤植のある可能性があります。また、本書に記載された情報には、定期的に変更が行われ、かかる変更は本書の最新版に反映されます。さらに、米国サンまたは日本サンは、本書に記載された製品またはプログラムを、予告なく改良または変更することがあります。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法 (外為法) に定められる戦略物資等 (貨物または役務) に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社の事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典: Sun™ Control Station 2.2 AllStart Module
Part No: 819-0442-10
Revision A



目次

- 1. はじめに 1
 - AllStart モジュールについて 1
 - Red Hat Kickstart 2
 - Sun Java Desktop Systems AutoYaSt 2
 - Solaris JumpStart 3
 - AllStart の必要条件 4
 - AllStart モジュールを使用するための手順 - 作業概要 4
 - ファイルとディストリビューションの追加 5
 - ペイロードの作成 5
 - プロファイルの作成 6
 - カスタムスクリプトの追加 6
 - クライアントの追加 6
 - クライアントの有効化または無効化 7
 - クライアントへのペイロードとプロファイルのインストール 7
 - Sun Control Station への新規クライアントのインポート 7
- 2. AllStart の機能 9
 - AllStart を使用するための手順 10
 - グラフィカルユーザーインターフェースの使用法 10
 - システムタイプの選択 10

ファイル	11
ファイルの表示	11
ファイルの追加	11
リモートロケーションからのファイルの追加	11
Sun Control Station ファイルシステムからのファイルの追加	13
ファイルの削除	14
スクリプト	15
スクリプトのアップロード	15
ディストリビューション	17
ディストリビューションの表示	17
ディストリビューションの追加	18
CD-ROM からディストリビューションを追加	18
コントロールステーションのローカルディレクトリからディストリビューションを追加	20
ディストリビューションの変更	21
ディストリビューションの削除	22
ペイロード	22
ペイロードテーブル	23
ペイロードの追加	23
Sun Java Desktop System (JDS) ペイロードの追加	23
SuSE ペイロードの追加	26
Red Hat ペイロードの追加	28
Solaris x86 ペイロードの追加	30
ペイロードの表示	32
ペイロードの変更	33
ペイロードの削除	34
ペイロードの複製	34
プロファイル	35
一般的な設定情報	35

ディスクパーティションの情報	36
認証情報および X Window 情報	38
カスタムスクリプト	38
プロファイルテーブル	38
プロファイルの追加	39
Sun Java Desktop System プロファイルの追加	39
SuSE プロファイルの追加	46
Red Hat プロファイルの追加	52
Solaris x86 プロファイルの追加	59
RAID パーティションの追加	63
ディスクパーティションの追加	66
プロファイルの表示	72
プロファイルの修正	72
プロファイルの削除	72
プロファイルの複製	73
クライアント	74
新規クライアントの追加	74
新規 Solaris x86 クライアントの追加	79
新規自動検出クライアントの追加	82
管理対象ホストのクライアントとしての追加	83
クライアントリストのインポート	84
クライアントリストの XML 書式	85
クライアントの有効化	86
クライアントの無効化	87
クライアントの表示	88
クライアントの修正	88
クライアントの削除	89
クライアントの構築	89

クライアントのビルドステータスの表示	90
サービス	90
クライアントを常にネットブートする	91
DHCP 情報の参照	91
DHCP 設定の修正	92
新規 DHCP 情報の追加	93
DHCP 情報の修正	94
DHCP 情報の削除	95
「クライアントを常にネットブートする」機能の有効化	96
自動検出機能	96
クライアントの自動検出向け設定	97
IP アドレスの範囲を指定する	97
自動検出クライアントを作成する	98
自動検出クライアントを有効化する	98
ホストマシンをネットブートする	98
「詳細」	99
Sun JDS ソフトウェアの登録	99
AllStart 初期設定の選択	99
3. アップグレード情報およびトラブルシューティングについて	101
Sun Fire V60x サーバーおよび Sun Fire V65x サーバーに必要な デバイスドライバ	101
Ethernet ドライバ	101
SCSI ドライバ	102
Sun Control Station ソフトウェアのアップグレード方法と AllStart 設定の維持方法	102
設定ファイルのカスタマイズ	103
トラブルシューティング	104
Terminal Windows	104
起動時の問題	104

DHCP サーバーまたは PXE ブートでの問題	104
pxelinux.0 のロード後にインストールプロセスがハングする	105
クライアント構成で起こり得る問題	106
カーネルのブート中にビルドプロセスがハングする	106
インストール時の問題	107
Solaris x86 ビルド時の問題	107
NFS ビルドのパフォーマンスを向上する	108
AllStart クライアントの再ビルド	108
Sun JDS クライアントのビルド時にシリアルコンソールの 出力が中断される	109
Sun JDS クライアントでのカーネルパラメータ	109
Sun JDS クライアントのビルド時の問題	109
フレームバッファの問題	109
X11 の構成上の問題	110
Red Hat クライアントのビルド時の問題	111
Red Hat 2.1 のビルド中に Anaconda エラーメッセージが 表示される	111
Sun Fire V20z を RHEL3.0 (64 ビット) でビルドすると AllStart がハングする	111
一般的な問題点	112
RAID デバイス上の root (/) および boot (/boot) パーティションの 作成時に判明している制限事項	112

第1章

はじめに

このマニュアルでは、AllStart コントロールモジュールの機能とグラフィカルユーザーインターフェースを説明するほか、Red Hat Linux、SuSE Linux、x86 上で稼働する Solaris™ オペレーティングシステム、および x86 上で稼働する Sun Java™ Desktop System (JDS) での AllStart の使用上の注意について説明します。

この章では AllStart の機能を紹介し、このモジュールを正しく動作させるために満たす必要がある条件、および AllStart コントロールモジュールを使用するにあたって必要な事項を簡単に説明します。

AllStart モジュールについて

AllStart コントロールモジュールはソフトウェアを配備するシステムであり、Sun™ Control Station を使用して対応 OS を関連するソフトウェアパッケージとともに初期インストールする作業を自動化します。この AllStart モジュールの機能を使用すれば、特定の構成を多数のクライアントにインストールし、自動的にソフトウェアをインストールすることができます。

AllStart は、Sun Control Station 2.2 基本ソフトウェアとともに専用サーバーにインストールされます。この専用サーバーは「コントロールステーション」と呼ばれます。ソフトウェアのインストールについては、『Sun Control Station 2.2 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

AllStart コントロールモジュールは、ソフトウェアペイロードの作成、クライアントプロファイルの定義、およびシステムインストールのモニター/確認用の共通ユーザーインターフェースを提供します。

この AllStart モジュールのグラフィカルユーザーインターフェースで実行できる機能は、次のとおりです。

- ファイルや RPM を選択し、クライアントに読み込む。
- 異なる OS ディストリビューションを選択し、クライアントに読み込む。

- ファイルや OS ディストリビューションで構成する、カスタマイズされたペイロードを作成する。
- 設定情報を含むプロファイルを作成する。
- インストール中に実行するカスタムスクリプトを読み込む。
- ペイロードとプロファイルをロードするクライアントを追加する (クライアントの MAC [Media Access Layer] アドレスを使用)。

AllStart モジュールには、Red Hat Kickstart、SuSE AutoYaST、Solaris JumpStart™ 技術が統合されており、Linux ベースシステムおよび Solaris x86 システムを、簡単に、同じ方法で自動的にインストールしたりカスタマイズしたりできます。

Red Hat Kickstart

Kickstart は Red Hat 機能の 1 つで、下に示すような Red Hat Linux インストール時のほとんどの作業を自動化します。

- 言語選択
- ネットワーク構成とディストリビューションソースの選択
- キーボード選択
- ブートローダーのインストール
- ディスクのパーティションとファイルシステムの生成
- マウス選択
- X Window システムサーバー設定
- タイムゾーン選択
- (初期) ルートパスワード選択
- タイムサーバー
- セキュリティオプションの設定 (md5、yp など)
- 配布ペイロードのカスタマイズ

Kickstart では、通常はキーボードを使って入力するような情報を設定ファイルに含めることにより、インストールプロセスを自動的に実行できます。Kickstart はまた、Red Hat Linux のディストリビューションに含まれていないソフトウェアを追加インストールするために使うこともできます。

Kickstart の詳細は、次の URL から該当する Red Hat のマニュアルを参照してください。<http://www.redhat.com/docs/>

Sun Java Desktop Systems AutoYaSt

AutoYaST は、1 つまたは複数の Sun Java Desktop System を自動的にかつユーザーの介入なしにインストールできるシステムで、インストーラである YaST2 と完全に統合されています。

AutoYaST ツールは、1 つまたは複数のシステム設定が可能です。設定内容は制御ファイルに保管され、自動インストール時に読み込まれます。またインストーラによってさまざまな方法で利用されます。

AutoYaST による設定は XML ベースで行われ、設定内容は YaST2 の設定モジュールと完全な互換性があります。

AutoYaST を使用することで、同じ環境とハードウェアを共有し、類似のタスクを実行する複数のシステムを、並行して簡単にインストールできます。設定ファイル (制御ファイルと呼ぶ) は、既存の設定リソースを使用して作成されます。制御ファイルは、それぞれ特定の環境に従って簡単にカスタマイズできます。

AutoYaST の詳細は、次の URL から該当する SuSE のマニュアルを参照してください。<http://www.suse.com/>

Solaris JumpStart

JumpStart ソフトウェアはシステムインストールを自動化するもので、Solaris ソフトウェアをシステムに自動的かつユーザーの介在なしにインストールすることができます。インストールは、個々のソフトウェアインストール要件を定義する作成済みプロファイルに基づいて行われます。インストールタスクを含めたシェルスクリプトを組み込むことも可能です。JumpStart は Solaris S9 x86 用の技術です。

インストールを自動化するため、JumpStart はプロファイルから次の情報を使用します。

- システムロケール
- タイムゾーン
- ネットマスク
- IPv6
- 端末タイプ
- セキュリティポリシー
- ネームサービス
- タイムサーバー
- クライアントの MAC アドレス
- クライアントの IP アドレス

JumpStart の詳細は、次の URL から該当する Solaris インストールマニュアルを参照してください。

<http://www.sun.com/documentation>

AllStart の必要条件

AllStart コントロールモジュールを正確に動作させるためには、次の条件をすべて満たす必要があります。

- Sun Control Station からのペイロードを取得するため、クライアントが「ネットブート」用に設定されていること。
- AllStart コントロールモジュールを動作させる Control Station と同一のサブネット上に、ほかの DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) サーバーが存在しないこと。
- 下に示すソフトウェアコンポーネントがクライアントにインストールされていること。
 - DHCP デーモン (dhcpd バージョン 3.0 以降)
 - TFTP (Trivial File Transfer Protocol)
 - HTTP (Hypertext Transfer Protocol)
 - Network Files Sharing デーモン (nfsd)
- Sun Control Station ソフトウェアを動作させるサーバー上に OS ディストリビューション (配布版 OS) の ISO イメージを保管する場合は、ハードディスクドライブ (HDD) に十分な管理容量を確保してください。

たとえば、通常の Linux OS ディストリビューションは約 2 G バイト程度になります。さらに、それら ISO ファイルはペイロードの作成時にほかのディレクトリにコピーされるため、使用されるディスク容量はその倍を見積もる必要があります。

アップロード中に ISO イメージはマウントされ、RPM ファイルは /scs/share/allstart/distro_id/ ディレクトリにコピーされます。OS ディストリビューションの読み込みが成功すれば、ISO イメージは削除できます。

AllStart モジュールを使用するための手順 - 作業概要

ここでは、AllStart コントロールモジュールからクライアントをインストールし、配備するにあたって必要な事項を簡単に説明します。「AllStart」メニューの各手順と説明について詳しくは、第 2 章を参照してください。

AllStart コントロールモジュールを使用するための手順は、大きく分けると次に示す作業から構成されます。

1. ファイル、ディストリビューション、およびスクリプトを追加します。

2. ファイルとディストリビューションからペイロードを作成します。
3. 設定情報、認証情報、およびスクリプトを含むプロファイルを作成します。
4. ペイロードとプロファイルをインストールするクライアントを選択し、クライアントエントリを有効化します。
5. ネットワークから起動(「ネットブート」)するクライアントを設定し、そのクライアントを再起動して Sun Control Station からペイロードとプロファイルを受け取るようにします。
6. 管理対象ホストを Sun Control Station に追加します。

ファイルとディストリビューションの追加

リモートロケーション、あるいはコントロールステーション上のローカルディレクトリからファイルの追加やディストリビューションのアップロードが行えます。これらのファイルとディストリビューションは、OSの一部としてクライアントにインストールされるペイロードの定義に使用されます。サポートされているディストリビューションの一覧については、『Sun Control Station 2.2 ソフトウェアのインストール』を参照してください。

ペイロードの作成

「ペイロード」は、OS ディストリビューションと、それとともにバンドルされる個別ファイルから構成されます。

ペイロードに含めたい OS ディストリビューションのコンポーネントを選択できます。個別ファイルは、ディストリビューションのインストール後に、クライアント上にインストールされます。

それらのファイルやディストリビューションは、OS に応じてローカルにあるいは CD-ROM 上に保管できます。Solaris OS ディストリビューション用にペイロードを作成する場合は、CD-ROM ではなく必ず DVD ISO イメージを使用してください。

ディストリビューションをローカルに保管する場合、`/scs/data/allstart/iso/` に保存する必要があります。

それぞれのペイロードには、一意の、記述的な名前を設定します。

プロファイルの作成

「プロファイル」とは、ペイロードに従ってクライアントに適用される設定情報を含むものです。セキュリティに関する設定も、プロファイルに設定できます。

プロファイルのパラメータは OS によって異なりますが、次のような項目が含まれます。

- デフォルトの言語
- キーボードの種類
- マウスの種類
- 設定するクライアントが配置されるタイムゾーン
- タイムサーバー
- クライアント用ルートパスワード
- ペイロードインストール後にクライアントを再起動するかどうかの選択
- ブートローダオプション
- HDD 向けのパーティションオプション
- RAID パーティション
- 認証情報
- X Configuration

カスタムスクリプトの追加

カスタムスクリプトをローカルファイルシステムからアップロードして、スクリプトを追加、削除、修正することができます。このカスタムスクリプト機能は、「AllStart」メニューから利用できます。

クライアントの追加

「クライアント」とは、OS とともにインストールおよび配備されるシステムです。クライアントには、ペイロードとプロファイルをインストールします。

クライアント情報のパラメータには、次のような項目があります。

- MAC アドレス
- インストール IP アドレス
- インストールの種類
- シリアルコンソール用出力ポート
- シリアルコンソールのボーレート
- ペイロードとプロファイルを読み込むインストールネットワークインタフェース (ethx)
- 読み込むペイロード
- 読み込むプロファイル
- クライアント上のネットワークインタフェースに関する情報

クライアントの有効化または無効化

クライアントエントリを作成した後、「AllStart Clients」テーブル内でそのクライアントを「有効化」し、ネットワーク上の対象のクライアントに見えるようにする必要があります。

注 – 再起動するとビルドを開始できるようクライアントのブートローダーが変更されるため、管理対象ホストは自動的に有効になります。クライアントの PXE および ネットブートに DHCP を使用するには、クライアントを再度有効化する必要があります。86 ページの「クライアントの有効化」を参照してください。

クライアントエントリの有効化を行わなければ、そのクライアントエントリが「見え」ないため、ネットブートを行なっても、そのクライアントはペイロードとプロファイルを受け取ることはできません。

クライアントへのペイロードとプロファイルのインストール

クライアントを構成してネットワークから起動します。

この設定を行うことで、クライアントを再起動すると、クライアントが Control Station からペイロードとプロファイルを「pull」動作で引き出せるようになります。また、この動作に対しては、「AllStart Clients」テーブル内でクライアントエントリを有効化する必要があります。

注 – インストールは、Sun Control Station からクライアントへの、アクティブな「push」操作ではありません。クライアントは、Control Station から、ペイロードとプロファイルを「pull」しなければなりません。つまり、「AllStart Clients」テーブル内のクライアントエントリに従って、クライアントはペイロードとプロファイルを受け取ることになります。

Sun Control Station への新規クライアントのインポート

ペイロードとプロファイルをクライアントにインストールすると、フレームワークに追加できるよう AllStart によってシステムが初期化されます。

クライアントを Sun Control Station フレームワークにインポートするには、ホスト追加機能 (「管理」→「ホスト」→「追加」) を使用します。

新規クライアントのインポートの詳細は、『Sun Control Station 2.2 管理者マニュアル』を参照してください。

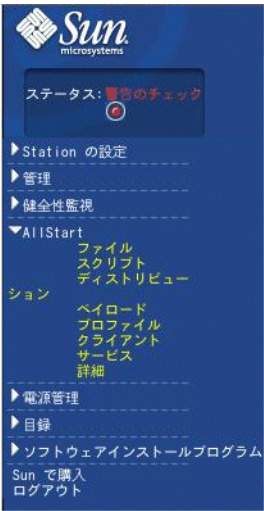
第2章

AllStart の機能

この章では、Sun Control Station の AllStart コントロールモジュールを通じて利用可能な機能とサービスの使用方法について説明します。

この章では、次の作業について説明しています。

表 2-1 AllStart の作業

AllStart のメニュー	作業	情報
	ファイルまたは RPM の追加	11 ページの「ファイル」
	OS ディストリビューションの追加	17 ページの「ディストリビューション」
	ベイロードの作成	22 ページの「ベイロード」
	カスタムスクリプトの追加	15 ページの「スクリプト」
	設定情報、ディスクパーティション、RAID パーティション、認証、および X Window 情報を含むプロファイルの作成	35 ページの「プロファイル」
	クライアントの追加と有効化	74 ページの「クライアント」
	クライアントの設定とネットワークからの再起動	89 ページの「クライアントの構築」
	DHCP 設定の表示と変更	91 ページの「DHCP 情報の参照」
	クライアントの自動検出向け設定	96 ページの「自動検出機能」
	Sun JDS ソフトウェアの登録	99 ページの「Sun JDS ソフトウェアの登録」
	初期設定の設定	99 ページの「AllStart 初期設定の選択」

AllStart を使用するための手順

AllStart の機能とサービスは、グラフィカルユーザーインターフェースの左側の欄にある「AllStart」メニューから利用できます。

グラフィカルユーザーインターフェースの使用法

本マニュアルでは、読者が Sun Control Station ソフトウェアの基本操作を理解していると想定して説明します。状態アイコン、選択ウィンドウ、スケジューラ、「タスクの進捗状況」ダイアログなどの基本的な Sun Control Station の機能については、『Sun Control Station 2.2 管理者マニュアル』を参照してください。

システムタイプの選択

AllStart の初期設定を設定して、対象とする OS ディストリビューションだけが表示されるように、AllStart 画面をカスタマイズできます。詳細は、99 ページの「詳細」を参照してください。

OS タイプの選択が必要になると常に表示される「システムタイプの選択」選択ウィンドウから、システムタイプを選択することも可能です (図 2-1を参照)。

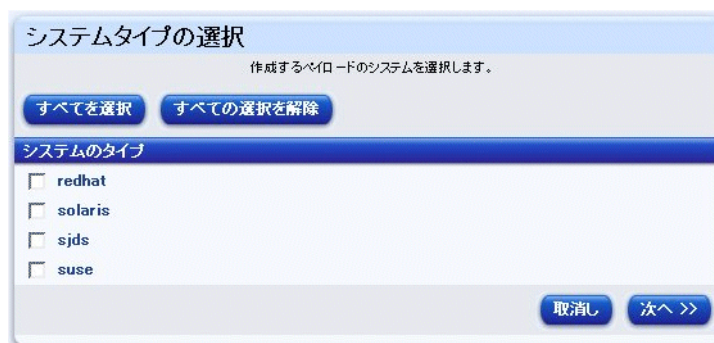


図 2-1 「システムタイプの選択」ウィンドウの選択

注 – AllStart の初期設定で表示する OS ディストリビューションを 1 つだけ選択した場合は、AllStart の手順で「システムタイプの選択」選択ウィンドウが表示されません。

ファイル

「ファイル」メニューからは、クライアントにインストールする個々のファイルを追加または削除できます。

ファイルの表示

すでに追加されているファイルを表示する手順は、次のとおりです。

- 「AllStart」→「ファイル」を選択します。
「AllStart ファイル」テーブルが表示されます。

ファイルの追加

リモートロケーション、あるいは Sun Control Station のファイルシステムからファイルを追加できます。

リモートロケーションからのファイルの追加

リモートロケーションからファイルを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「ファイル」を選択します。
「AllStart ファイル」テーブルが表示されます。
2. 右下の「追加」をクリックします。
「リモートの場所からのファイルの追加」テーブルが表示されます (図 2-2 を参照)。

注 - ファイアウォールを経由するシステムの場合、プロキシサーバーの設定が必要になることもあります。ステーションの設定については、『Sun Control Station 2.2 管理者マニュアル』を参照してください。



図 2-2 「リモートの場所からのファイルの追加」 テーブル

3. プルダウンメニューからファイルの種類を選択します。「RPM」、「svr4」、「ファイル」
4. 次のどちらかの方法で、ファイルの位置を認識させます。
 - 「ファイル」の横のラジオボタンをクリックします。パスとファイル名を入力するか、ボタンをクリックしてファイルを指定します。
 - 「URL」の横のラジオボタンをクリックします。ファイルの URL を入力します。
5. 「RPM」ファイルタイプを選択した場合、次のうちいずれかのフラグも選択できます。

注 – これらのフラグは、ファイルや sv4 パッケージには影響しません。

- 「force」
- 「nodeps」
- 「ignorearch」

これらのフラグは、インストール後のフェーズで RPM に直接受け渡されます。

6. 「ただちにアップロード」をクリックします。
「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

Sun Control Station ファイルシステムからのファイルの追加

Control Station のローカルファイルシステムからファイルを追加する手順は、次のとおりです。

注 – この画面にファイルを表示するには、そのファイルが Control Station のディレクトリ /scs/data/allstart/iso/ に読み込まれていなければなりません。

1. 「AllStart」 → 「ファイル」 を選択します。
「AllStart ファイル」 テーブルが表示されます。
2. 右下の「追加」 をクリックします。
「リモートの場所からのファイルの追加」 テーブルが表示されます。
3. テーブルの上のプルダウンメニューから、「SCS ファイルシステムからのファイルを追加」 を選択します。
「SCS ファイルシステムからのファイルを追加」 テーブルが表示されます (図 2-3 を参照)。

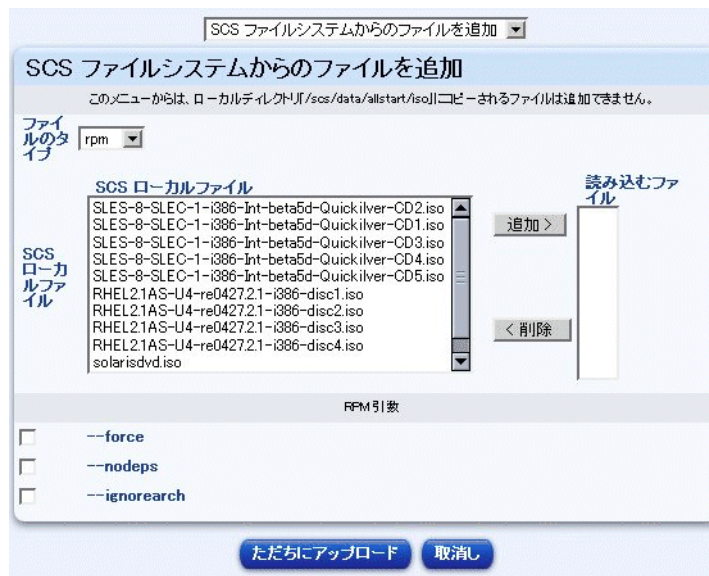


図 2-3 「SCS ファイルシステムからのファイルを追加」 テーブル

4. プルダウンメニューからファイルの種類を選択します。「RPM」、「svr4」、「ファイル」

5. 「SCS ローカルファイル」スクロールウィンドウで、読み込むファイルを選択します。
6. 「追加」をクリックして、「読み込むファイル」スクロールウィンドウにファイルを移動します。

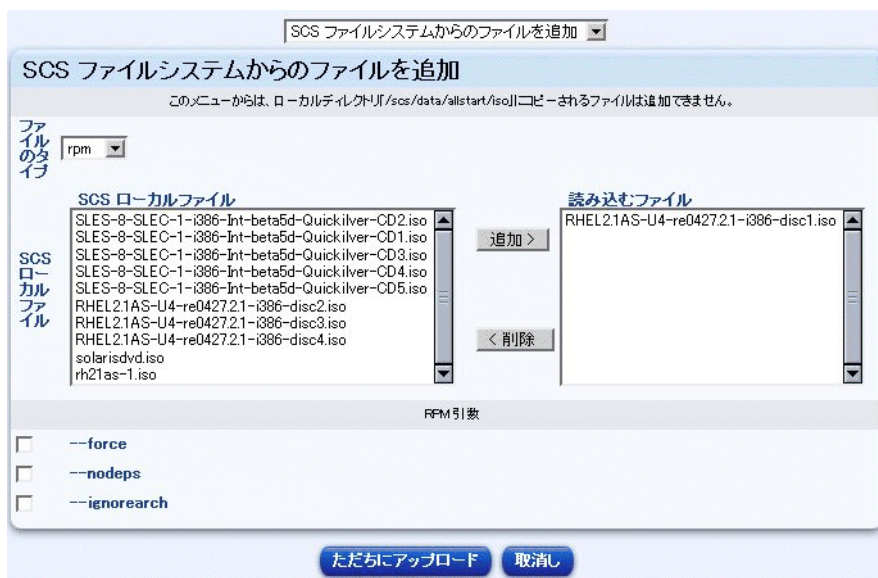


図 2-4 「SCS ファイルシステムからのファイルを追加」 テーブル

7. 「ただちにアップロード」をクリックします。
「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。進行状況バーが 100% になったら、タスクは完了です。

ファイルの削除

「AllStart ファイル」テーブルからファイルを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「ファイル」を選択します。
「AllStart ファイル」テーブルが表示されます。
2. ファイルをクリックして選択します。上の「すべてを選択」をクリックすれば、リスト内のすべてのファイルを選択できます。
3. 右下の「削除」をクリックします。
ダイアログが表示され、削除の実行を確認されます。

4. 「削除」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。進行状況バーが 100% になったら、タスクは完了です。

スクリプト

スクリプト機能を使用すると、スクリプトを「カスタムスクリプトオプションの編集」テーブルにアップロードし、そこからプロファイルに追加するスクリプトを選択することができます。

スクリプトのアップロード

「カスタムスクリプトオプションの編集」テーブルにカスタムスクリプトをアップロードする手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「スクリプト」を選択します。

「ユーザー定義のカスタムスクリプトのアップロード」テーブルが表示されます (図 2-6 を参照)。

2. 「追加」をクリックします。

「ローカルファイルシステムからの新規スクリプトの追加」テーブルが表示されます (図 2-5 を参照)。

ローカルファイルシステムからの新規スクリプトの追加

Bourne シェルスクリプトのみをアップロードしてください。

ソースファイル 参照...

説明

タイプ post

システム

システムで実行しない

システムで実行する

追加 >

< 削除

redhat
solaris
sjds
suse

ただちにアップロード 取消し

図 2-5 「ローカルファイルシステムからの新規スクリプトの追加」テーブル

3. 次の情報を入力します。

- スクリプトファイルのパスとファイル名を入力します。またはボタンをクリックしてスクリプトファイルを選択します。
- スクリプトに関する説明を入力します。
- スクリプトのタイプを選択します。
 - 「Pre」 - スクリプトをインストールの前に実行します (ドライバなど)。
 - 「Post」 - スクリプトをインストールの後に実行します。
 - 「Postnochroot」 - インストールの後に動作しますが、root としての実行を必要としません (Red Hat システムにのみ有効です)。
 - 「chroot」 - インストールの後に実行します (SuSE システムにのみ有効です)。
- スクリプトを実行するシステムの種類を選択します。「追加」または「削除」ボタンを使用して、スクロールウィンドウ間でスクリプトを移動します。

4. 「ただちにアップロード」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。タスクが完了したら、「完了」をクリックします。

カスタムスクリプトが、「ユーザー定義のカスタムスクリプトのアップロード」テーブル内に表示されます (図 2-6 を参照)。

このテーブルから、ほかのスクリプトを追加、編集、削除できます。

名前	説明	タイプ
<input type="checkbox"/> RH_define_jpg	test_upload	post

追加 編集 削除

すべてを選択 すべての選択を解除

図 2-6 「ユーザー定義のカスタムスクリプトのアップロード」テーブル

- さらに別のスクリプトを追加するには、手順 2 から手順 4 までを繰り返します。
- スクリプトを編集するには、そのスクリプトの横のチェックボックスをクリックしてから「編集」をクリックします。

「アップロードされたカスタムスクリプト情報の変更」テーブルが表示されます。手順 3 内の情報でパラメータを変更してスクリプトを追加します。
- スクリプトを削除するには、そのスクリプトの横のチェックボックスをクリックしてから「削除」をクリックします。

ディストリビューション

「AllStart ディストリビューション」テーブルから、ディストリビューションの追加、変更、削除が行えます。

ディストリビューションの表示

すでに追加されているディストリビューションを表示する手順は、次のとおりです。

- 「AllStart」→「ディストリビューション」を選択します。
「AllStart ディストリビューション」テーブルが表示されます。



図 2-7 「AllStart ディストリビューション」テーブル

ディストリビューションの追加

ディストリビューションを追加する方法は、2 通りあります。

- ディストリビューションを CD-ROM から追加します (SuSE、Red Hat、Sun JDS ディストリビューションなど)
- ローカルディレクトリからディストリビューションを追加します

注 – Solaris x86 ディストリビューションは、DVD ISO イメージからのみ利用できません。クライアントにインストール対象の OS イメージを読み込むには、ディストリビューションを AllStart にアップロードします。ローカルに保管する場合、ディストリビューションは /scs/data/allstart/iso/ に保存する必要があります。

注 – CD-ROM から OS ディストリビューションをアップロードする場合は、「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されたときにオプションの「バックグラウンドでのタスクの実行」をクリックしないでください。クリックすると、次の CD-ROM に進むことができず、ディストリビューション全体がアップロードされません。万一、タスクをバックグラウンドに移動した場合は、このディストリビューションを「AllStart ディストリビューション」テーブルから削除し、同じ手順を最初からやり直す必要があります。

CD-ROM からディストリビューションを追加

CD-ROM からディストリビューションを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「ディストリビューション」を選択します。
「AllStart ディストリビューション」テーブルが表示されます。
2. 右下の「追加」をクリックします。
「CD-ROM からディストリビューションをアップロードする」テーブルが表示されます。

図 2-8 「CD-ROM からディストリビューションをアップロードする」テーブル

3. そのディストリビューションに関する説明を入力します。

注 – それぞれのディストリビューションについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの記述に基づいてディストリビューションを区別しています。

4. CD-ROM へのデフォルトパスは、`/dev/cdrom` です。
必要であれば、このパスは修正できます。
5. 「ただちにアップロード」をクリックします。
「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

注 – オプションの「バックグラウンドでのタスクの実行」はクリックしないでください。クリックすると、次の CD-ROM に進むことができず、ディストリビューション全体がアップロードされません。万一、タスクをバックグラウンドに移動した場合は、このディストリビューションを「AllStart ディストリビューション」テーブルから削除し、同じ手順を最初からやり直す必要があります。

6. ディストリビューションが正常に追加されたことを示すメッセージが表示されたら、「完了」をクリックします。

コントロールステーションのローカルディレクトリからディストリビューションを追加

この方法では、物理的な .iso ファイルをディレクトリ /scs/data/allstart/iso/ のローカルファイルシステムに読み込み、「ディストリビューションのアップロード」テーブルのスクロールウィンドウに表示させます。

注 – ローカルディレクトリにあるディストリビューションを表示する場合、それぞれのディストリビューションの *.iso ファイルは名前ですべて置換えられます。ファイル名には通常、ディスク番号 (SLES-8-SLEC-1-i386-Int-beta5d-Quicksilver-CD1.iso など) が含まれます。この場合、1 つのディストリビューションについて、必ずすべての *.iso ファイルを同時に選択および転送する必要があります。

コントロールステーションのローカルディレクトリからディストリビューションを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「ディストリビューション」を選択します。
「AllStart ディストリビューション」テーブルが表示されます。
2. 右下の「追加」をクリックします。
「CD-ROM からディストリビューションをアップロードする」テーブルが表示されます。
3. テーブルの上にあるプルダウンメニューから、「SCS ISO からディストリビューションを追加」を選択します。
「ディストリビューションのアップロード」テーブルが表示されます (図 2-9 を参照)。
4. そのディストリビューションに関する説明を入力します。

注 – それぞれのディストリビューションについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの記述に基づいてディストリビューションを区別しています。

5. 「SCS ローカルファイル」スクロールウィンドウで、読み込むファイルを選択します。
6. 「追加」をクリックして、「ディストリビューションファイル」スクロールウィンドウにファイルを移動します。
7. ファイルを選択したら、「ただちにアップロード」をクリックします。
「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。進行状況バーが 100% になったら、タスクは完了です。

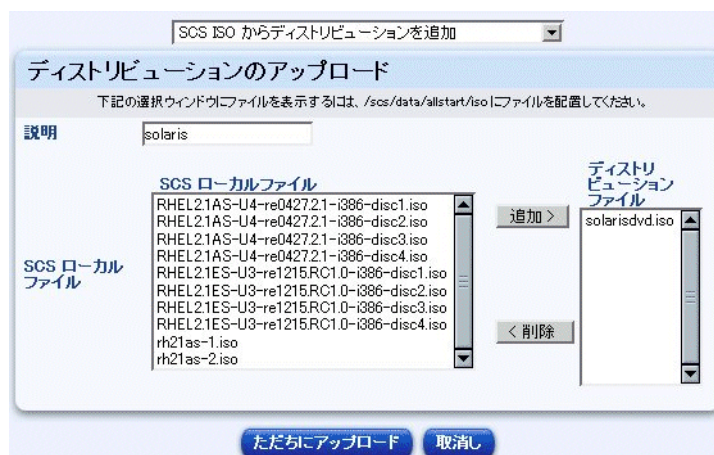


図 2-9 「ディストリビューションのアップロード」テーブル

ディストリビューションの変更

注 – 「変更」オプションを使用して、ディストリビューションに関連するファイルを変更することはできません。ファイルを変更するには、新しいディストリビューションを作成する必要があります。

ディストリビューションを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「ディストリビューション」を選択します。
「AllStart ディストリビューション」テーブルが表示されます。

2. ディストリビューションをクリックして選択します。
3. 右下の「変更」をクリックします。
「ディストリビューション情報の変更」テーブルが表示されます。
ディストリビューションの説明を修正します。

注 – それぞれのディストリビューションについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの記述に基づいてディストリビューションを区別しています。

4. 「保存」をクリックします。
「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。進行状況バーが 100% になったら、タスクは完了です。

ディストリビューションの削除

「AllStart ディストリビューション」テーブルからディストリビューションを削除する手順は、次のとおりです。

注 – ディストリビューションがあるペイロードを参照している場合、そのディストリビューションは削除できません。その場合は、まずそのペイロードを変更または削除する必要があります。

1. 「AllStart」→「ディストリビューション」を選択します。
「AllStart ディストリビューション」テーブルが表示されます。
2. ディストリビューションをクリックして選択します。上の「すべてを選択」をクリックすれば、リスト内のすべてのディストリビューションを選択できます。
3. 右下の「削除」をクリックします。
ディストリビューションがペイロードを参照している場合は、そのディストリビューションを削除できません。
ディストリビューションがペイロードを参照していない場合は、ダイアログボックスが表示され、削除の確認を求められます。
4. 「削除」をクリックします。
「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。進行状況バーが 100% になったら、タスクは完了です。

ペイロード

ペイロードは、クライアントにインストールするために選択する OS ディストリビューション、パッケージ、ファイルから構成されます。

ペイロードは、「AllStart ペイロード」テーブルから追加、表示、変更、削除、複製できます。

ペイロードテーブル

このテーブルは、現在定義されているペイロードのほか、ペイロードのタイプと説明を表示します。ペイロードの詳細表示、変更、削除、複製を行うには、そのペイロードをクリックします。

現在定義されているペイロードを表示する手順は、次のとおりです。

- 「AllStart」→「ペイロード」を選択します。
「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。



図 2-10 「AllStart ペイロード」テーブル

ペイロードの追加

この項の手順は、次の OS 別にまとめて説明します。

- 23 ページの「Sun Java Desktop System (JDS) ペイロードの追加」
- 26 ページの「SuSE ペイロードの追加」
- 28 ページの「Red Hat ペイロードの追加」
- 30 ページの「Solaris x86 ペイロードの追加」

注 – AllStart の初期設定で表示する OS ディストリビューションを 1 つだけ選択した場合は、AllStart の手順で「システムタイプの選択」選択ウィンドウが表示されません。手順が直接開始されます。詳細は、99 ページの「詳細」を参照してください。

Sun Java Desktop System (JDS) ペイロードの追加

Sun JDS ペイロードを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「ペイロード」を選択します。
「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。
2. 下の「追加」をクリックします。
「システムタイプの選択」テーブルが表示されます。
3. 次のタイプを選択します。
sjds
4. 下の「次へ」をクリックします。
「AllStart ペイロードの作成」テーブルが表示されます。
5. 下に示すフィールドを設定します。
 - 「ペイロード名」 - それぞれのペイロードについて、一意の、記述的な名前を入力します。

注 – それぞれのペイロードについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの名前に基づいてペイロードを区別します。

- 「ペイロードの説明」 - このペイロードの説明を入力します。
 - 「ディストリビューション」 - プルダウンメニューから、このペイロードに関連付けるディストリビューションを選択します。
6. 「次へ」をクリックします。
Sun JDS ペイロードについて、「AllStart ペイロードのディストリビューション固有オプション」テーブルが表示されます (図 2-11 を参照)。



図 2-11 Sun JDS - 「AllStart ペイロードのディストリビューション固有オプション」テーブル

7. 「基本パッケージ」選択ウィンドウで、地域に適したオプションのラジオボタンをクリックします。

- 「デフォルトシステムで StarOffice をインストール - その他の国用」
- 「デフォルトシステムに StarSuite をインストール - 日本、中国、韓国および台湾専用」

8. 「読み込まれていないパッケージ」スクロールウィンドウで、読み込むパッケージを選択します。

「Add-on Packages」は、機能に基づいて読み込むための RPM のグループです（「Development Tools」または「Laptop Packages」など）。

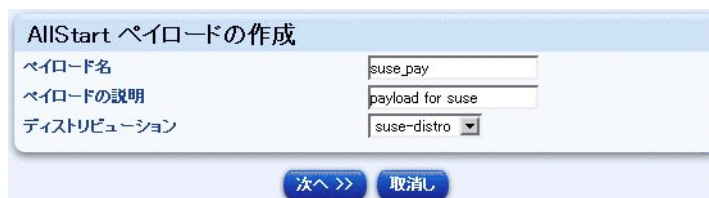
9. 「追加」をクリックして、「読み込まれたパッケージ」スクロールウィンドウにパッケージを移動します。

10. 「読み込まれていないファイル」スクロールウィンドウで、読み込むファイルを選択します。
これらは、基本のディストリビューションが読み込まれた後にそれぞれ読み込まれます。
11. 「追加」をクリックして、「読み込まれたファイル」スクロールウィンドウにファイルを移動します。
12. 「保存」をクリックします。
「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。進行状況バーが 100% になったら、タスクは完了です。
13. 「完了」をクリックします。
「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。指定したペイロードが概要テーブルに表示されていることを確認します。

SuSE ペイロードの追加

SuSE ペイロードを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「ペイロード」を選択します。
「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。
2. 下の「追加」をクリックします。
「システムタイプの選択」テーブルが表示されます。
3. 次のタイプを選択します。
SuSE
4. 下の「次へ」をクリックします。
「AllStart ペイロードの作成」テーブルが表示されます。



AllStart ペイロードの作成	
ペイロード名	<input type="text" value="suse_pay"/>
ペイロードの説明	<input type="text" value="payload for suse"/>
ディストリビューション	<input type="text" value="suse-distrow"/>

図 2-12 「AllStart ペイロードの作成」テーブル

5. 下に示すフィールドを設定します。

- 「ペイロード名」 - それぞれのペイロードについて、一意の、記述的な名前を入力します。

注 - それぞれのペイロードについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの名前に基づいてペイロードを区別します。

- 「ペイロードの説明」 - このペイロードの説明を入力します。
- 「ディストリビューション」 - プルダウンメニューから、このペイロードに関連付けるディストリビューションを選択します。

6. 「次へ」をクリックします。

SuSE ペイロードについて、「AllStart ペイロードのディストリビューション固有オプション」テーブルが表示されます。

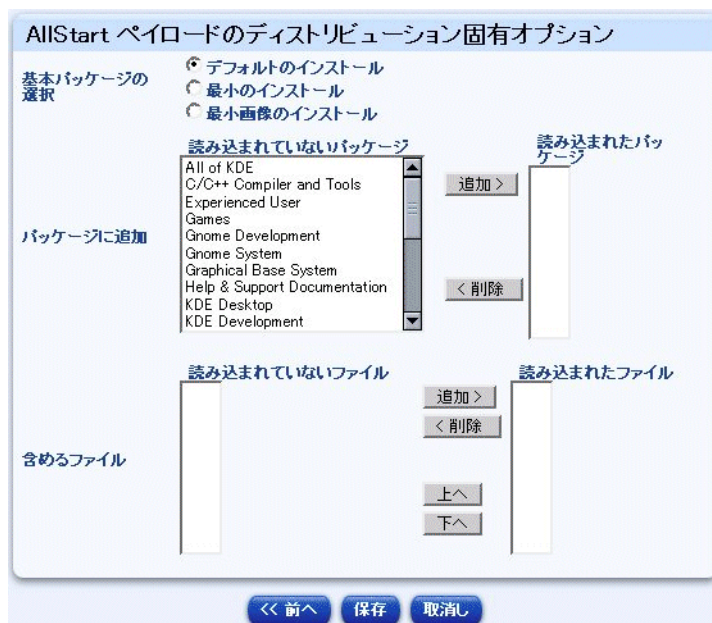


図 2-13 SuSE - 「AllStart ペイロードのディストリビューション固有オプション」テーブル

7. 「基本パッケージ」選択ウィンドウで、地域に適したオプションのラジオボタンをクリックします。

- 「デフォルトのインストール」
- 「最小のインストール」
- 「最小画像のインストール」

8. 「追加」をクリックして、「読み込まれたパッケージ」スクロールウィンドウにパッケージを移動します。
9. 「読み込まれていないファイル」スクロールウィンドウで、読み込むファイルを選択します。
これらは、基本のディストリビューションが読み込まれた後にそれぞれ読み込まれます。
10. 「追加」をクリックして、「読み込まれたファイル」スクロールウィンドウにファイルを移動します。
11. 「保存」をクリックします。
「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。進行状況バーが 100% になったら、タスクは完了です。
12. 「完了」をクリックします。
「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。指定したペイロードが概要テーブルに表示されていることを確認します。

Red Hat ペイロードの追加

Red Hat ペイロードを作成する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「ペイロード」を選択します。
「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。
2. 下の「追加」をクリックします。
「システムタイプの選択」テーブルが表示されます。
3. 次のタイプを選択します。
`redhat`
4. 「次へ」をクリックします。
「AllStart ペイロードの作成」テーブルが表示されます。
5. 下に示すフィールドを設定します。
 - 「ペイロード名」 - それぞれのペイロードについて、一意の、記述的な名前を入力します。

注 – それぞれのペイロードについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの名前に基づいてペイロードを区別します。

- 「ペイロードの説明」 - このペイロードの説明を入力します。

- 「ディストリビューション」 - プルダウンメニューから、このペイロードのディストリビューションを選択します。

6. 「次へ」をクリックします。

Red Hat ペイロードについて、「AllStart ペイロードのディストリビューション固有オプション」テーブルが表示されます。

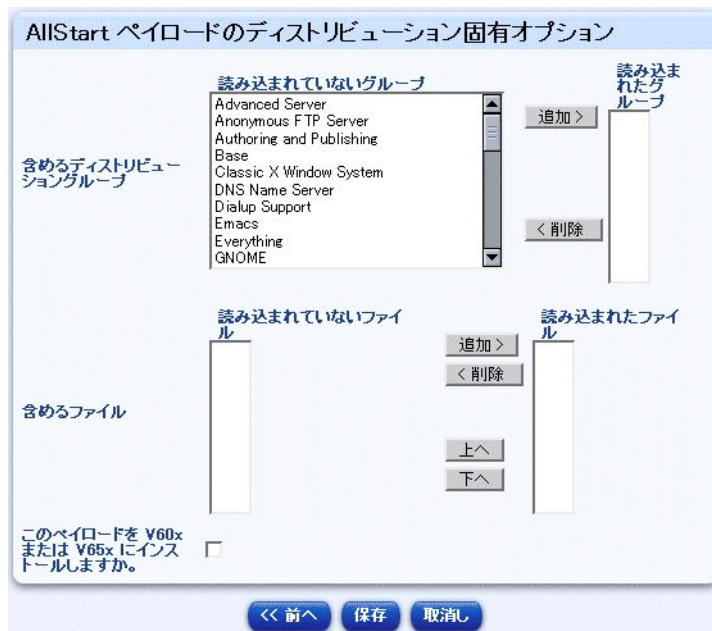


図 2-14 Red Hat - 「AllStart ペイロードのディストリビューション固有オプション」テーブル

7. 「読み込まれていないグループ」スクロールウィンドウで、読み込むグループを選択します。

「ディストリビューショングループ」は、機能に基づいて読み込むための RPM のグループです (DNS サーバー、「Games and Entertainment support」、「Printing support」、「Emacs support」など)。

「Everything」エントリを選択すると、ディストリビューション内のすべての RPM が追加されます。

8. 「追加」をクリックして、「読み込まれたグループ」スクロールウィンドウにグループを移動します。

9. 「読み込まれていないファイル」スクロールウィンドウで、読み込むファイルを選択します。

これらは、基本のディストリビューションが読み込まれた後にそれぞれ読み込まれます。

「追加」をクリックして、「読み込まれたファイル」スクロールウィンドウにファイルを移動します。

注 – 「読み込まれたファイル」スクロールウィンドウに複数のファイルを移動する場合は、インストールする正しい順序にファイルを配置する必要があります。ファイルはリストの最上部からインストールされます。リスト内の順序は、ファイルを選択して、「上へ」または「下へ」ボタンを使用して変更できます。

10. そのペイロードが Sun Fire™ V60x サーバーまたは Sun Fire V65x サーバー上にインストールされる場合は、チェックボックスをクリックして有効にします。

このオプションは、クライアントが Linux インストールの前に必要な Sun Control Station ドライバをロードできるようにします。このオプションは、特殊な Sun Fire V60x または Sun Fire V65x ドライバを必要とする OS ディストリビューションでのみ利用できます。ほかのドライバを必要としない、より最新版の OS ディストリビューションには表示されません。

注 – このオプションを有効にした場合、ディストリビューションに特殊なドライバが含まれ、V60/V65 システムにのみ読み込めるようになります。

11. 「保存」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。進行状況バーが 100% になったら、タスクは完了です。

終了すると、「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。指定したペイロードが概要テーブルに表示されていることを確認します。

Solaris x86 ペイロードの追加

Solaris x86 ペイロードを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「ペイロード」を選択します。
「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。
2. 下の「追加」をクリックします。
「システムタイプの選択」テーブルが表示されます。
3. 次のタイプを選択します。

solaris

4. 下の「次へ」をクリックします。

「AllStart ペイロードの作成」テーブルが表示されます。



図 2-15 「AllStart ペイロードの作成」テーブル

5. 下に示すフィールドを設定します。

- 「ペイロード名」 - それぞれのペイロードについて、一意の、記述的な名前を入力します。

注 - それぞれのペイロードについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの名前に基づいてペイロードを区別します。

- 「ペイロードの説明」 - このペイロードの説明を入力します。
- 「ディストリビューション」 - プルダウンメニューから、このペイロードのディストリビューションを選択します。

6. 「次へ」をクリックします。

Solaris ペイロードについて、「AllStart ペイロードのディストリビューション固有オプション」テーブルが表示されます (図 2-16 を参照)。



図 2-16 Solaris - 「AllStart ペイロードのディストリビューション固有オプション」テーブル

7. 「基本パッケージの選択」スクロールウィンドウで、読み込むパッケージを選択します。
 - Core System Support
 - Developer System support
 - End User System Support
 - Entire Distribution
 - Entire Distribution plus OEM support
8. 「追加」をクリックして、「読み込まれたパッケージ」スクロールウィンドウにパッケージを移動します。
9. 「保存」をクリックします。
「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。進行状況バーが 100% になったら、タスクは完了です。
10. 「完了」をクリックします。
「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。指定したペイロードが概要テーブルに表示されていることを確認します。

ペイロードの表示

ペイロードに関する情報を表示する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「ペイロード」を選択します。
「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます (図 2-10 を参照)。
2. ペイロードをクリックして選択します。

3. 「表示」をクリックします。

「AllStart ペイロードの表示」テーブルが表示され、次のような情報が提示されます。

- ペイロード名
- ペイロードの説明
- ペイロードに関連付けられているディストリビューション
- ペイロードグループまたはパッケージ
- 個別のペイロードファイル (ファイルがある場合)

4. 「完了」をクリックすると、「AllStart ペイロード」テーブルに戻ります。

ペイロードの変更

ペイロードを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「ペイロード」を選択します。

「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。

2. ペイロードをクリックして選択します。

3. 「変更」をクリックします。

「AllStart ペイロードの変更」テーブルが表示されます。

4. 必要に応じて次のフィールドを変更します。

- 「ペイロード名」 - そのペイロードについて、一意の、記述的な名前を入力します。

注 - それぞれのペイロードについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの名前に基づいてペイロードを区別します。

- 「ペイロードの説明」 - このペイロードの説明を入力します。
- 「ディストリビューション」 - プルダウンメニューから、このペイロードのディストリビューションを選択します。

5. 「次へ」をクリックします。

「AllStart ペイロードのディストリビューション固有オプション」テーブルが表示されます。

6. 「保存」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。進行状況バーが 100% になったら、タスクは完了です。

7. 「完了」をクリックします。

「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。指定したペイロードが概要テーブルに表示されていることを確認します。

ペイロードの削除

ペイロードを削除する手順は、次のとおりです。

注 – ペイロードがあるクライアントを参照している場合、そのペイロードは削除できません。まず、該当するクライアントを修正または削除する必要があります。

1. 「AllStart」→「ペイロード」を選択します。

「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。

2. ペイロードをクリックして選択します。上の「すべてを選択」をクリックすれば、リスト内のすべてのペイロードを選択できます。

3. 「削除」をクリックします。

- ペイロードがクライアントを参照している場合は、そのディストリビューションを削除できません。
- ペイロードがクライアントを参照していない場合は、ダイアログが表示され、削除の確認を行います。

4. 「削除」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。進行状況バーが 100% になったら、タスクは完了です。

5. 「完了」をクリックします。

「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。

ペイロードの複製

ペイロードの複製は、既存ペイロードの正確なコピーを別名で作成できます。これは、似たようなペイロードを作成するときに便利です。

ペイロードを複製する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「ペイロード」を選択します。

「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。

2. ペイロードをクリックして選択します。

3. 「複製」をクリックします。

「ペイロードの複製」テーブルが表示されます。

4. 必要に応じて次のフィールドを変更します。

- 「ペイロード名」 - それぞれのペイロードについて、一意の、記述的な名前を入力します。

注 – それぞれのペイロードについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの名前に基づいてペイロードを区別します。

- 「ペイロードの説明」 - このペイロードの説明を入力します。

5. 「保存」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

6. 「完了」をクリックします。

「AllStart ペイロード」テーブルが表示されます。ペイロードの複製が「AllStart ペイロード」テーブルに表示されていることを確認します。

プロファイル

プロファイルとは、ペイロードに従ってクライアントに適用される設定情報を含むものです。プロファイルは、追加、表示、変更、削除、または複製できます。

プロファイルを追加する場合、クライアントについて次の情報を設定します。

- 一般的な設定情報
- ディスクパーティション
- RAID パーティション (省略可能)
- 認証および X Window 設定
- カスタムスクリプト

一般的な設定情報

このパラメータには OS のタイプと同様に、プロファイルの説明、デフォルト言語、マウスの種類、キーボードの種類、タイムゾーン、タイムサーバー、ルートパスワードなどが含まれます。ペイロードとプロファイルをインストールしたらホストを再起動するかどうかを選択できます。

ディスクパーティションの情報

プロファイルごとに、ルート (/) パーティションと少なくとも 1 つのスワップパーティションを設定する必要があります。Red Hat および SuSE オペレーティングシステムには、RAID パーティションも設定できます。

注 – AllStart モジュールの実行する RAID 設定検証の内容は、ごく限定的なものです。AllStart プロファイルから正常に作成した RAID 設定は、必ずしも SuSE などの OS ベンダーによってサポートされているとは限りません。

ディスクパーティション機能と RAID パーティション機能は、「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウから利用できます。RAID ありの見本ウィンドウについては、図 2-17 を参照してください。RAID なしの「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウについては、図 2-18 を参照してください。

デバイス / パーティション番号	マウントポイント	サイズ (MB)	タイプ
<input type="checkbox"/> /dev/sda	RAID.171	5000	software RAID

RAID の追加 追加 削除 編集

RAID とディスクのデバイス

デバイス / パーティション番号	処理
/dev/sda	 

<< 前へ 次へ >> 取消し

図 2-17 RAID ありの「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウ

「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウの上側には、次の項目が表示されます。

- デバイス/パーティション番号
- マウントポイント
- サイズ (MB)
- 「タイプ」(ファイルシステム)

「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウの下側には、ディスクドライブとデバイスが表示されます。

ディスクパーティションの情報

すべてを選択

すべての選択を解除

デバイス / パーティション番号	マウントポイント	サイズ (MB)	タイプ
<input type="checkbox"/> /dev/sda	/	FREE	ext3
<input type="checkbox"/> /dev/sdb	/home	5000	ext3
<input type="checkbox"/> /dev/sdc	swap	2048	swap

追加

削除

編集

RAID とディスクのデバイス

デバイス / パーティション番号	処理
/dev/sdc	<div></div> <div></div>
/dev/sdb	<div></div> <div></div>
/dev/sda	<div></div> <div></div>

<< 前へ

次へ >>

取消し

図 2-18 「ディスクパーティションの情報」 選択ウィンドウ

表 2-2 「ディスクパーティションの情報」 ウィンドウのボタン

ボタン	説明
「RAID の追加」	RAID パーティションを追加するには、この「RAID の追加」をクリックします。「パーティションのオプション」ウィンドウを呼び出します。Sun JDS または Solaris x86 のプロファイル作成時には RAID パーティションがこれらの OS にサポートされていないため、このボタンは省略されます。
「追加」	ディスクパーティションを追加するには、この「追加」をクリックします。「パーティションのオプション」ウィンドウを呼び出します。
「削除」	パーティションの横のチェックボックスをクリックしてからこの「削除」をクリックします。
「編集」	選択項目を変更するには、パーティションの横のチェックボックスをクリックしてからこの「編集」をクリックします。「パーティションのオプション」ウィンドウを呼び出します。
削除のアイコン	デバイスを削除するには、これを使用します。ディスクドライブまたはデバイスを選択してから、このアイコンをクリックします。
鉛筆のアイコン	デバイスを変更するには、これを使用します。デバイスを選択してから、この鉛筆のアイコンをクリックします。「ディスクドライブのオプション」テーブルを呼び出します。

認証情報および X Window 情報

クライアントの認証情報と X Window 設定情報を設定できます。認証情報は OS によって異なり、NIS および LDAP 認証、プロキシサービス設定エージェントを含めることができます。X Window 設定には、X11 設定と 3D サポートモニター情報のパラメータがあります。

カスタムスクリプト

カスタムスクリプトをプロファイルに追加する場合は、まずそのスクリプトを利用できるようにアップロードする必要があります。15 ページの「スクリプト」を参照してください。それから、プロファイルを追加するときにそのスクリプトを追加できます。

プロファイルテーブル

「AllStart プロファイル」テーブルは、現在定義されているプロファイルを表示します。

「AllStart プロファイル」テーブルを表示する手順は、次のとおりです。

- 「AllStart」→「プロファイル」を選択します。

「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます。次に、このテーブルの各機能を説明します。



AllStart プロファイル		
すべてを選択 すべての選択を解除		
プロファイル名	タイプ	説明
<input type="checkbox"/> redhat-profile	redhat	Profile for Redhat
<input type="checkbox"/> solaris-profile	solaris	Solaris Profile
<input type="checkbox"/> sjds-profile	sjds	Profile for SJDS
<input type="checkbox"/> suse-profile	suse	Profile for Suse
<input type="checkbox"/> suse-burl	suse	suse profile
追加 表示 変更 削除 複製		

図 2-19 「AllStart プロファイル」テーブル

プロファイルの追加

この項の手順は、次の OS 別にまとめて説明します。

- 39 ページの「Sun Java Desktop System プロファイルの追加」
- 46 ページの「SuSE プロファイルの追加」
- 52 ページの「Red Hat プロファイルの追加」
- 59 ページの「Solaris x86 プロファイルの追加」

注 – AllStart の初期設定で表示する OS ディストリビューションを 1 つだけ選択した場合は、AllStart の手順で「システムタイプの選択」選択ウィンドウが表示されません。手順が直接開始されます。詳細は、99 ページの「詳細」を参照してください。

Sun Java Desktop System プロファイルの追加

注 – ここで説明する手順には、設定パラメータを複数含む UI 画面が多数含まれます。

Sun JDS プロファイルを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「プロファイル」を選択します。
「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます。
2. 「追加」をクリックします。
「システムタイプの選択」テーブルが表示されます。
3. 次のタイプを選択します。
sjds
4. 「次へ」をクリックします。
「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます (図 2-20 を参照)。

図 2-20 Sun JDS - 「AllStart プロファイルの追加」 テーブル

5. 次のパラメータを設定します。

- 「プロファイル名」 - それぞれのプロファイルについて、一意の、記述的な名前を入力します。

注 - それぞれのプロファイルについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの名前に基づいてプロファイルを区別します。

- 「プロファイルの説明」 - そのプロファイルに関する説明を入力します。
- 「デフォルトの言語」
- 「キーボードの種類」
- 「マウスの種類」
- 「サウンドカードのベンダー」 - スクロールウィンドウから選択します。
- 「サウンドカード」 - スクロールウィンドウから選択します。
- 「タイムゾーン」 - プルダウンメニューから、設定対象ホストが設置されているタイムゾーンを選択します。
- 「タイムサーバー」 (オプション)
- 「root パスワード」 - このプロファイルを使用するホストの root パスワードを入力し、パスワードを確認します。
- 「インストール後にシステムをリブートする」 - ペイロードとプロファイルのインストール後にホストを再起動する場合は、このチェックボックスをクリックします。

6. テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「ブートローダーオプションの編集」テーブルが表示されます (図 2-21 を参照)。

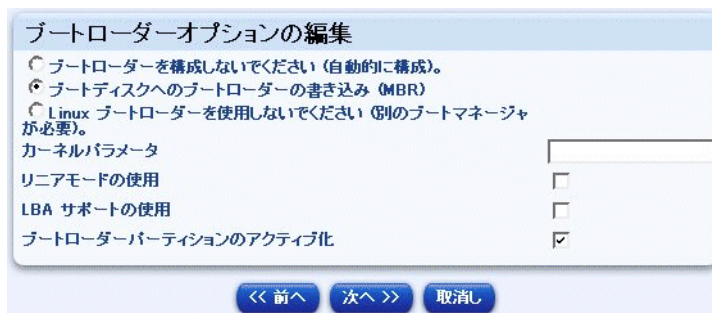


図 2-21 Sun JDS - 「ブートローダーオプションの編集」テーブル

7. ブートローダーについて、次のパラメータを設定します。

注 – シリアルコンソールを通じてマシンを構築するときに、ブートローダーを選択する場合は、この手順の最後で、対応する GRUB カスタマイズスクリプトを追加する必要があります。

- ラジオボタンをクリックして、次のオプションの 1 つを選択します。
 - 「ブートローダーを構成しないでください (自動的に構成)」
 - 「ブートディスクへのブートローダーの書き込み (MBR)」
 - 「Linux ブートローダーを使用しないでください (別のブートマネージャが必要)」
- 「カーネルパラメータ」
- 「リニアモードの使用」
- 「LBA サポートの使用」
- 「ブートローダーパーティションのアクティブ化」 - このオプションはデフォルトで有効になっています。

8. 先へ進むには、テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウが表示されます。図 2-22 に例を示します。

9. ディスクパーティションを追加します。

「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウでは、パーティションの追加、編集、削除のほか、ディスクドライブの編集と削除が行えます。

少なくとも、root (/) パーティションと 1 つのスワップパーティションを定義する必要があります。

ディスクパーティションを追加する手順については、66 ページの「ディスクパーティションの追加」を参照してください。

パーティションを追加したら、引き続き手順 10 の手順を行います。

10. 「保存」をクリックします。

「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウに、ディスクパーティションが表示されます。



図 2-22 Sun JDS - 「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウ

11. 「次へ」をクリックして続行します。

「クライアント構成」テーブルが表示されます (図 2-23 を参照)。

クライアントの構成	
NIS 認証	
NIS の有効化	<input type="checkbox"/>
NIS ドメイン	<input type="text"/>
NIS サーバーの検索にブロードキャストを使用する	<input type="checkbox"/>
NIS サーバー	<input type="text"/>
LDAP 認証	
LDAP の有効化	<input type="checkbox"/>
LDAP サーバー	<input type="text"/>
LDAP ベース名	<input type="text"/>
プロキシサービスの構成	
プロキシサービスの有効化	<input type="checkbox"/>
HTTP プロキシ	<input type="text"/>
FTP プロキシ	<input type="text"/>

図 2-23 Sun JDS - 「クライアント構成」テーブル

12. クライアントに適切なパラメータを設定します。

注 – 認証オプションについては、該当する Sun JDS ユーザーマニュアルで説明されています。

a. NIS 認証

- NIS の有効化
- NIS ドメインの入力
- NIS サーバ検出のためのブロードキャストの使用
- NIS サーバーを入力します。

b. LDAP 認証

- LDAP の有効化
- LDAP サーバーの入力
- LDAP ベース名の入力

c. プロキシサービスの構成

- プロキシサービスの有効化
- HTTP プロキシ
- FTP プロキシ
- ユーザー名 (必要に応じて)
- パスワード (必要に応じて)

13. テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「クライアントの構成 (続き)」テーブルが表示されます。

次のパラメータを設定します。

d. 構成エージェントの設定

- 構成エージェントの設定の有効化
- ホスト名を入力します。
- ポート名を入力します。
- ルートの場所を入力します。

14. テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「X の構成オプション」テーブルが表示されます (図 2-24 を参照)。



図 2-24 Sun JDS - 「X の構成オプション」ウィンドウ

15. 次の X Window パラメータを設定します。

- ラジオボタンをクリックして、次の 3 つのオプションから 1 つを選択します。
 - X11 設定を自動で構成する
 - X11 設定を構成しない
 - X11 設定を手動で構成する

注 – X11 設定を手動で構成する場合にのみ、次の設定を構成します。

- 3D サポート (可能な場合) を有効にするには、チェックボックスをクリックします。
- モニターの色深度と解像度を設定します。
- スクロールウィンドウからモニターのベンダーを選択します。
- スクロールウィンドウからモニターを選択します。

16. テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「カスタムスクリプトオプションの編集」テーブルが表示されます (図 2-25 を参照)。

名前	説明	タイプ
<input type="checkbox"/> grub_add_console.sh	Add console redirection to Grub	post
<input type="checkbox"/> grub_remove_splash_img.sh	Remove graphical boot message from Grub	post
<input type="checkbox"/> sun_client_dhcp.sh	Sun recommend DHCP client settings	post

図 2-25 Sun JDS - 「カスタムスクリプトオプションの編集」 テーブル

17. カスタムスクリプトをプロファイルに追加します。

この「カスタムスクリプトオプションの編集」テーブルには、プロファイルに追加可能なカスタムスクリプトが多数含まれます。ほかのスクリプトをこのテーブルにアップロードするには、15 ページの「スクリプト」を参照してください。

注 – カスタムスクリプト sun_client_dhcp.sh により、クライアントの DHCP 設定を特定のデフォルト値に設定します。

- a. チェックボックスをクリックして、プロファイルに追加するカスタムスクリプトを選択します。

注 – シリアルコンソールを通じてマシンを構築している場合に、手順 7 でブートローダーを選択した場合は、この時点で対応する GRUB のカスタマイズスクリプトを追加します。それを行わないと、ブートログメッセージとインストールメッセージはコンソールに表示されません。

- b. 「保存」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

18. 「完了」をクリックします。

「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます (図 2-19 を参照)。作成したばかりのプロファイルが表示されていることを確認します。

SuSE プロファイルの追加

注 – ここで説明する手順には、設定パラメータを複数含む UI 画面が多数含まれます。

SuSE プロファイルを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「プロファイル」を選択します。
「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます。
2. 下の「追加」をクリックします。
「システムタイプの選択」テーブルが表示されます。
3. 次のタイプを選択します。
SuSE
4. 「次へ」をクリックします。
「AllStart プロファイルの追加」テーブルが表示されます。

図 2-26 SuSE - 「AllStart プロファイルの追加」 テーブル

5. 下記のパラメータを設定します。

- 「プロファイル名」 - それぞれのプロファイルについて、一意の、記述的な名前を入力します。

注 - それぞれのプロファイルについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの名前に基づいてプロファイルを区別します。

- 「プロファイルの説明」 - そのプロファイルに関する説明を入力します。
- 「デフォルトの言語」
- 「キーボードの種類」
- 「マウスの種類」
- 「サウンドカードのベンダー」
- 「サウンドカード」
- 「タイムゾーン」 - プルダウンメニューから、設定対象ホストが設置されているタイムゾーンを選択します。
- 「タイムサーバー (オプション)」
- 「root パスワード」 - このプロファイルを使用するホストの root パスワードを入力し、パスワードを確認します。
- 「インストール後にシステムをリブートする」 - ペイロードとプロファイルのインストール後にホストを再起動する場合は、このチェックボックスをクリックします。

6. 「次へ」をクリックします。

「ブートローダーオプションの編集」テーブルが表示されます。

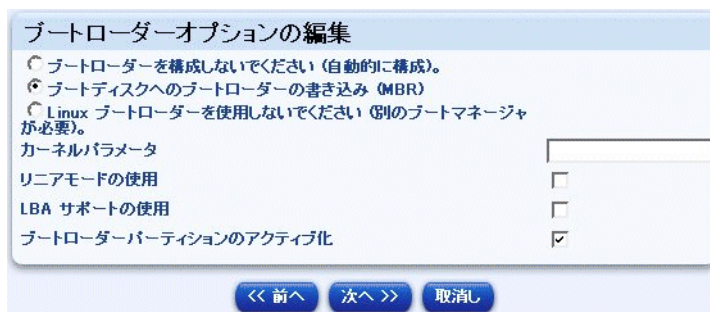


図 2-27 「ブートローダーオプションの編集」テーブル

7. ブートローダーについて、次のパラメータを設定します。

注 - シリアルコンソールを通じてマシンを構築するときに、ブートローダーを選択する場合は、この手順の最後で、対応する GRUB カスタマイズスクリプトを追加する必要があります。

- a. ラジオボタンをクリックして、次のオプションの 1 つを選択します。

- 「ブートローダーを構成しない (自動的に構成)」
- 「ブートディスクへのブートローダーの書き込み (MBR)」
- 「Linux ブートローダーを使用しない (別のブートマネージャーが必要)」
- 「カーネルパラメータ」
- 「リニアモードの使用」
- 「LBA サポートの使用」
- 「ブートローダーパーティションのアクティブ化」 - このオプションはデフォルトで有効になっています。

b. 「次へ」をクリックします。

「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウが表示されます。

8. パーティションをこのプロファイルに追加します。

このプロファイルには、ルート (/) パーティションと少なくとも 1 つのスワップパーティションを定義する必要があります。RAID パーティションの定義には、オプションも用意されています。

- RAID パーティションを追加するには、手順 9 に進みます。
- RAID パーティションを追加せずにディスクパーティションを追加するには、手順 10 に進みます。

9. RAID パーティションを追加します。

手順については、63 ページの「RAID パーティションの追加」を参照してください。

少なくとも 2 つの RAID パーティションを定義してから、ディスクパーティションを追加します。

10. ディスクパーティションを追加します。

手順については、66 ページの「ディスクパーティションの追加」を参照してください。

パーティションを追加できたらこの手順に戻り、引き続き手順 11 に進みます。

11. 「保存」をクリックします。

「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウに、パーティションが表示されます。

ディスクパーティションの情報

すべてを選択

すべての選択を解除

デバイス / パーティション番号	マウントポイント	サイズ (MB)	タイプ
<input type="checkbox"/> /dev/sda	swap	AUTO	swap
<input type="checkbox"/> /dev/sda	/	FREE	ext3
<input type="checkbox"/> /dev/sda	/boot	AUTO	ext3

RAID の追加

追加

削除

編集

RAID とディスクのデバイス

デバイス / パーティション番号	処理
/dev/sda	<div> <div></div> <div></div> </div>

<< 前へ

次へ >>

取消し

図 2-28 SuSE - 「ディスクパーティションの情報」 選択ウィンドウ

12. 「次へ」をクリックして続行します。
「クライアント構成」テーブルが表示されます (図 2-29 を参照)。

クライアントの構成

NIS 認証

NIS の有効化

NIS ドメイン

NIS サーバーの検索にブロードキャストを使用する

NIS サーバー

LDAP 認証

LDAP の有効化

LDAP サーバー

LDAP ベース名

プロキシサービスの構成

プロキシサービスの有効化

HTTP プロキシ

FTP プロキシ

<< 前へ

次へ >>

取消し

図 2-29 SuSE - 「クライアント構成」 テーブル

13. クライアントに適切なパラメータを設定します。
 - a. NIS 認証

- NIS の有効化
- NIS ドメインの入力
- NIS サーバ検出のためのブロードキャストの使用
- NIS サーバの入力

b. LDAP 認証

- LDAP の有効化
- LDAP サーバの入力
- LDAP ベース名の入力

c. プロキシサービスの構成

- プロキシサービスの有効化
- HTTP プロキシ
- FTP プロキシ

14. テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「X の構成オプション」テーブルが表示されます (図 2-30 を参照)。

図 2-30 SuSE - 「X の構成オプション」テーブル

15. 次の X Window パラメータを設定します。

- ラジオボタンをクリックして、次の 3 つのオプションから 1 つを選択します。
 - X11 設定を自動で構成する
 - X11 設定を構成しない
 - X11 設定を手動で構成する

注 – X11 設定を手動で構成する場合にのみ、次の設定を構成します。

- 3D サポート (可能な場合) を有効にするには、チェックボックスをクリックします。
- モニターの色深度と解像度を設定します。
- スクロールウィンドウからモニターのパネラーを選択します。
- スクロールウィンドウからモニターを選択します。

16. テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「カスタムスクリプトオプションの編集」テーブルが表示されます (図 2-31 を参照)。

カスタムスクリプトオプションの編集		
必要なカスタムスクリプトを選択してください		
名前	説明	タイプ
<input type="checkbox"/> grub_add_console.sh	Add console redirection to Grub	post
<input type="checkbox"/> grub_remove_splash_img.sh	Remove graphical boot message from Grub	post
<input type="checkbox"/> grub_remove_timeout.sh	Allows for quicker boot with Grub if only serial console is used	post

<< 前へ 保存 取消し

図 2-31 SuSE - 「カスタムスクリプトオプションの編集」 テーブル

17. カスタムスクリプトをこのプロファイルに追加します。

この「カスタムスクリプトオプションの編集」テーブルには、プロファイルに追加可能なカスタムスクリプトが多数含まれます。ほかのカスタムスクリプトをこのテーブルにアップロードするには、15 ページの「スクリプト」を参照してください。

カスタムスクリプトをプロファイルに追加する手順は、次のとおりです。

- a. チェックボックスをクリックして、プロファイルに追加するカスタムスクリプトを選択します。

注 – シリアルコンソールを通じてマシンを構築している場合に、手順 7 でブートローダーを選択した場合は、この時点で対応する GRUB のカスタマイズスクリプトを追加します。それを行わないと、ブートログメッセージとインストールメッセージはコンソールに表示されません。

- b. 「保存」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

18. 「完了」をクリックします。

「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます。作成したばかりのプロファイルが表示されていることを確認します。

Red Hat プロファイルの追加

注 – ここで説明する手順には、設定パラメータを複数含む UI 画面が多数含まれます。

Red Hat プロファイルを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「プロファイル」を選択します。
「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます。
2. 下の「追加」をクリックします。
「システムタイプの選択」テーブルが表示されます。
3. 次のタイプを選択します。
redhat
4. 「次へ」をクリックします。
「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます (図 2-32 を参照)。
5. 下記のパラメータを設定します。
 - 「プロファイル名」 - それぞれのプロファイルについて、一意の、記述的な名前を入力します。

注 – それぞれのプロファイルについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの名前に基づいてプロファイルを区別します。

- 「プロファイルの説明」 - そのプロファイルに関する説明を入力します。
- 「デフォルトの言語」
- 「キーボードの種類」
- 「マウスの種類」
- 「3 ボタンマウスのエミュレート」 - 2 ボタンマウスで、3 ボタンマウスのエミュレーションを有効にする場合、このチェックボックスをクリックします。
- 「タイムゾーン」 - プルダウンメニューから、設定対象ホストが設置されているタイムゾーンを選択します。
- 「タイムサーバー (オプション)」
- 「root パスワード」 - このプロファイルを使用するホストの root パスワードを入力し、パスワードを確認します。
- 「インストール後にシステムをリブートする」 - ペイロードとプロファイルのインストール後にホストを再起動する場合は、このチェックボックスをクリックします。

プロファイル名	rh_pro
プロファイルの説明	rh_serv
デフォルトの言語	English
キーボード	U.S. English
マウス	Generic Mouse (PS/2)
3 ボタンマウスのエミュレート	<input type="checkbox"/>
タイムゾーン	America/Los_Angeles
タイムサーバー (オプション)	
root パスワード:	*****
確認用パスワード:	*****
インストール後にシステムをリブートする	<input checked="" type="checkbox"/>

次へ >> 取消し

図 2-32 Red Hat - 「AllStart プロファイルの追加」 テーブル

6. 「次へ」をクリックします。

「ブートローダーオプションの編集」テーブルが表示されます (図 2-33 を参照)。

7. ブートローダーについて、次のパラメータを設定します。

注 – シリアルコンソールを通じてマシンを構築するときに、ブートローダーとして GRUB または LILO を選択する場合は、この手順の最後で、対応する GRUB または LILO カスタマイズスクリプトを追加する必要があります。

- 「ブートローダーのインストール」 - ブートローダーをインストールするときは、このチェックボックスをクリックします。
- 「ブートローダーの選択」 プルダウンメニューから、次のうちいずれかのブートローダーを選択します。LILO または GRUB。
- 「カーネルパラメータ」
- GRUB ブートローダーを選択した場合
 - GRUB パスワードを入力します。
 - チェックボックスをクリックすると、GRUB パスワードの暗号化が設定されます。
- LILO ブートローダーを選択した場合
 - 1 つ目のチェックボックスをクリックすると、リニアモードの使用が設定されます。
 - 2 つ目のチェックボックスをクリックすると、インストール時に 1ba32 モードの使用が強制されます。

ブートローダーオプションの編集

ブートローダーのインストール ☐

ブートローダーの選択 LLO

カーネルパラメータ

GRUB オプション

GRUB パスワードの使用

GRUB パスワードの暗号化 ☐

LLO オプション

リニアモードの使用 ☐

Iba32 モードの強制使用 ☒

<< 前へ 次へ >> 取消し

図 2-33 「ブートローダーオプションの編集」テーブル

8. 「次へ」をクリックします。
「パーティションのオプション」テーブルが表示されます (図 2-34 を参照)。
9. ラジオボタンをクリックして、3 つのセクションの設定を行います。
 - 「マスターブートレコード」
 - 「マスターブートレコードのクリア」
 - 「マスターブートレコードをクリアしない」
 - 「既存のパーティションで実行する処理」
 - 「既存のすべてのパーティションの削除」
 - 「既存の Linux パーティションの削除」
 - 「既存のパーティションの保持」
 - 「ディスクラベルで実行する処理」
 - 「ディスクラベルの初期化」
 - 「ディスクラベルを初期化しないでください」



図 2-34 Red Hat - 「パーティションのオプション」 テーブル

10. 「次へ」をクリックします。

「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウが表示されます。

11. パーティションをこのプロファイルに追加します。

このプロファイルには、ルート (/) パーティションと少なくとも 1 つのスワップパーティションを定義する必要があります。RAID パーティションの定義には、オプションも用意されています。

- RAID パーティションを追加するには、手順 12 に進みます。
- RAID パーティションを定義せずにディスクパーティションを追加するには、手順 13 に進みます。

12. RAID パーティションを追加します。

手順については、63 ページの「RAID パーティションの追加」を参照してください。少なくとも 2 つの RAID パーティションを追加してから、ディスクパーティションを追加します。

13. ディスクパーティションを追加します。

手順については、66 ページの「ディスクパーティションの追加」を参照してください。

パーティションを追加できたらこの手順に戻り、引き続き手順 14 に進みます。

14. 「保存」をクリックします。

「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウに、パーティションが表示されます (図 2-35 を参照)。



図 2-35 Red Hat - 「ディスクパーティションの情報」 選択ウィンドウ

15. 「次へ」をクリックします。

「認証情報の編集」テーブルが表示されます (図 2-36 を参照)。

16. クライアントに次のパラメータを設定します。

注 – これらのオプションについては、該当する Red Hat のマニュアルで説明されています。詳細は、<http://www.redhat.com/docs/> を参照してください。

a. シャドウパスワードと MD5 チェックサム

- シャドウパスワードオプションは、デフォルトで有効化されています。
- 「MD5 の有効化」オプションはデフォルトで有効化されています。

b. 「NIS 認証」

- 「NIS の有効化」
- NIS ドメインの入力
- 「NIS サーバーの検索にブロードキャストを使用する」
- NIS サーバーを入力します。

c. LDAP 認証

- 「LDAP の有効化」
- LDAP サーバーの入力
- LDAP ベース名の入力

認証情報の編集	
シャドウパスワードの有効化	Y
MD5 の有効化	Y
NIS 認証	
NIS の有効化	<input type="checkbox"/>
NIS ドメイン	<input type="text"/>
NIS サーバーの検索にブロードキャストを使用する	<input type="checkbox"/>
NIS サーバー	<input type="text"/>
LDAP 認証	
LDAP の有効化	<input type="checkbox"/>
LDAP サーバー	<input type="text"/>
LDAP ベース名	<input type="text"/>

図 2-36 Red Hat - 「認証情報の編集」 テーブル

17. テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「X の構成オプション」テーブルが表示されます (図 2-37 を参照)。

18. 次の X Window パラメータを設定します。

- X Window システムを有効にするには、チェックボックスをクリックします。

注 - X Window システムが有効にされていない場合、このテーブルの以下のパラメータはすべて無効になります。

- モニターの色深度と解像度を設定します。
- プルダウンメニューからデフォルトデスクトップを選択します。GNOME または KDE のいずれかを選択します。
- チェックボックスをクリックすると、起動時に X Window システムが起動します。
- プルダウンメニューからビデオカードを選択します。
- プルダウンメニューからビデオカードに使用可能な RAM サイズを選択します。
- プルダウンメニューからモニターを選択します。
- あるいは、使用するモニターの水平同期と垂直同期の値を指定することもできます。このオプションを使うには、チェックボックスをクリックして、「水平同期」 / 「垂直同期」の値をそれぞれのフィールドに入力します。

図 2-37 Red Hat - 「X の構成オプション」 テーブル

19. テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「カスタムスクリプトオプションの編集」 テーブルが表示されます。

20. カスタムスクリプトをプロファイルに追加します。

この「カスタムスクリプトオプションの編集」 テーブルには、プロファイルに追加可能なカスタムスクリプトが多数含まれます。

注 – ほかのスクリプトをこのテーブルにアップロードするには、15 ページの「スクリプト」を参照してください。

- a. チェックボックスをクリックして、プロファイルに追加するカスタムスクリプトを選択します。

注 – シリアルコンソールを通じてマシンを構築している場合に、ブートローダーに GRUB または LILO を選択していた場合には、この時点で GRUB または LILO のカスタマイズスクリプトを追加します。それを行わないと、ブートログメッセージとインストールメッセージはコンソールに表示されません。

b. 「保存」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。タスクが完了するまで待ちます。

21. 「完了」をクリックします。

「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます。作成したばかりのプロファイルが表示されていることを確認します。

Solaris x86 プロファイルの追加

注 – ここで説明する手順には、設定パラメータを複数含む UI 画面が多数含まれます。

Solaris x86 プロファイルを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「プロファイル」を選択します。

「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます。このテーブルに、現在定義されているプロファイル名が一覧表示されます。

2. 「追加」をクリックします。

「システムタイプの選択」テーブルが表示されます。

3. 次のタイプを選択します。

solaris

4. 「次へ」をクリックします。

「AllStart プロファイルの追加」テーブルが表示されます (図 2-38 を参照)。

図 2-38 Solaris x86 - 「AllStart プロファイルの追加」 テーブル

5. 下記のパラメータを設定します。

- 「プロファイル名」 - それぞれのプロファイルについて、一意の、記述的な名前を入力します。

注 - それぞれのプロファイルについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの名前に基づいてプロファイルを区別します。

- 「プロファイルの説明」 - そのプロファイルに関する説明を入力します。
- 「デフォルトの言語」
- 「端末」
- 「タイムゾーン」 - プルダウンメニューから、設定対象ホストが設置されているタイムゾーンを選択します。
- 「タイムサーバー (オプション)」
- 「root パスワード」 - このプロファイルを使用するホストの root パスワードを入力し、パスワードを確認します。
- 「インストール後にシステムをリブートする」 - ペイロードとプロファイルのインストール後にホストを再起動する場合は、このチェックボックスをクリックします。
- 「IPv6 インターネットプロトコルの使用」

6. 「次へ」をクリックします。

「ディスクパーティションの情報」 選択ウィンドウが表示されます (図 2-39 を参照)。

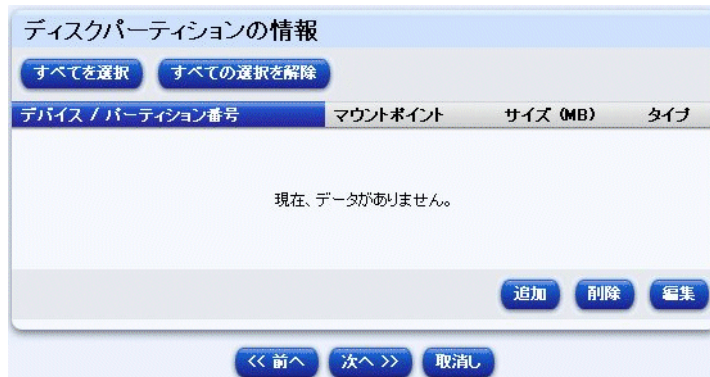


図 2-39 Solaris x86 - 「ディスクパーティションの情報」 選択ウィンドウ

7. プロファイルにディスクパーティションの情報を追加します。

少なくとも、root (/) パーティションと 1 つのスワップパーティションを定義する必要があります。

手順については、66 ページの「ディスクパーティションの追加」を参照してください。

ディスクパーティションを追加できたらこの手順に戻り、引き続き手順 8 に進みます。

8. 「パーティションのオプション」テーブルで「保存」をクリックして先に進みます。

「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウに、ディスクパーティションが表示されます。

9. 「次へ」をクリックします。

「認証情報の編集」テーブルが表示されます (図 2-40 を参照)。



図 2-40 Solaris x86 - 「認証情報の編集」 テーブル

10. クライアントに次のパラメータを設定します。

a. 「NIS 認証」

- 「NIS の有効化」
- NIS ドメインの入力
- 「NIS サーバーの検索にブロードキャストを使用する」
- NIS サーバーを入力します。

b. 「LDAP 認証」

- 「LDAP の有効化」
- LDAP サーバーの入力
- LDAP ベース名の入力

11. テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「カスタムスクリプトオプションの編集」 テーブルが表示されます。



名前	説明	タイプ
<input type="checkbox"/> grub_add_console.sh	Add console redirection to Grub	post
<input type="checkbox"/> grub_remove_splash_img.sh	Remove graphical boot message from Grub	post
<input type="checkbox"/> grub_remove_timeout.sh	Allows for quicker boot with Grub if only serial console is used*	post

図 2-41 Solaris x86 - 「カスタムスクリプトオプションの編集」 テーブル

12. カスタムスクリプトをプロファイルに追加します。

この「カスタムスクリプトオプションの編集」テーブルには、プロファイルに追加可能なカスタムスクリプトが多数含まれます。ほかのスクリプトをこのテーブルにアップロードするには、15 ページの「スクリプト」を参照してください。

カスタムスクリプトをプロファイルに追加する手順は、次のとおりです。

- a. チェックボックスをクリックして、プロファイルに追加するカスタムスクリプトを選択します。
- b. 「保存」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。タスクが完了するまで待ちます。

13. 「完了」をクリックします。

「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます。作成したばかりのプロファイルが表示されていることを確認します。

RAID パーティションの追加

プロファイル向け RAID パーティションの定義には、オプションが用意されています (SuSE および Red Hat オペレーティングシステムのみ)。RAID パーティションを含めるには、少なくとも 2 つの RAID パーティションをプロファイルに定義する必要があります。

ディスクパーティションを定義する前に RAID パーティションを定義するには、この手順を行ってください。ディスクパーティションを追加する手順については、66 ページの「ディスクパーティションの追加」を参照してください。

注 – AllStart モジュールの実行する RAID 設定検証の内容は、ごく限定的なものです。AllStart プロファイルから正常に作成した RAID 設定は、必ずしも SuSE などの OS ベンダーによってサポートされているとは限りません。

ここに記載する手順では、ブートローダーパラメータの設定手順でプロファイルの追加手順を完了していることを前提とします。「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウを表示します。

RAID パーティションを定義する手順は、次のとおりです。

1. 「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウから「RAID の追加」をクリックします。

次に示すような情報メッセージが表示されます。

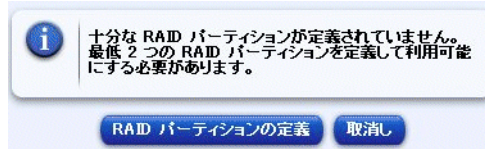


図 2-42 「RAID パーティションの定義」情報メッセージ

2. この情報メッセージを無視します。メッセージの下に「RAID パーティションの定義」をクリックします。

「パーティションのオプション」テーブルが表示されます。

A dialog box titled 「パーティションのオプション」 (Partition Options). It has a light blue header. Inside, there are several fields and buttons. At the top right is a button 「新規マウントディレクトリの追加」 (Add new mount directory). Below it are two dropdown menus: 「マウントポイント」 (Mount point) and 「ファイルシステムのタイプ」 (File system type), both set to 「software RAID」. Below these is a text input field for 「サイズ (MB)」 (Size in MB) with the value 「5000」. Below that is a section titled 「追加オプション」 (Additional options). It contains three radio buttons: 「固定サイズ」 (Fixed size) which is selected, 「ディスクの未使用の容量をすべて使用」 (Use all unused disk capacity), and 「最大許容サイズ (MB):」 (Maximum allowable size in MB) with a text input field below it. At the bottom left is a label 「特定のドライブにパーティションを作成」 (Create partition on specific drive) next to a dropdown menu set to 「sda」. At the bottom right is a button 「ディスクドライブの追加」 (Add disk drive). At the very bottom are two buttons: 「保存」 (Save) and 「取消し」 (Cancel).

図 2-43 「パーティションのオプション」テーブル

3. RAID パーティションのサイズを入力し、「保存」をクリックします。
「ディスクパーティションの情報」テーブルに、テーブルに一覧表示していたパーティションが表示されます。
4. 次の RAID パーティションを定義します。「RAID の追加」をクリックし、手順 2 と手順 3 を繰り返します。
「パーティションのオプション」テーブルが表示されたら、サイズを設定して、スクロールリストから別のドライブを選択します。
5. 「保存」をクリックします。
「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウが表示されます。追加したばかりの RAID パーティションがテーブルに表示されることを確認します。

ディスクパーティションの情報

すべてを選択

すべての選択を解除

デバイス/パーティション番号	マウントポイント	サイズ (MB)	タイプ
<input type="checkbox"/> sda	RAID.11	5000	software RAID
<input type="checkbox"/> sdc	RAID.21	5000	software RAID

RAID の追加

追加

削除

編集

RAID とディスクのデバイス

デバイス/パーティション番号	処理
sdc	
sda	

<< 前へ

次へ >>

取消し

図 2-44 「ディスクパーティションの情報」

6. RAID のマウントポイントを定義します。
 - a. 「ディスクパーティションの情報」ウィンドウから「RAID の追加」をクリックします。
 「RAID オプション」テーブルが表示されます (図 2-45 を参照)。
 - b. /home など、スクロールリストからマウントポイントを選択します。



図 2-45 「RAID オプション」 テーブル

注 – RAID マウントポイントに複数のパーティションが定義されている場合、このパーティションのサブセットを使用するには、「RAID オプション」テーブルの「追加」および「削除」ボタンを使用して RAID マウントポイントのサブセットを定義します。

c. 「保存」をクリックします。

「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウが表示されます。

注 – さらに別のソフトウェアの RAID パーティションを追加するには、「RAID の追加」をもう一度クリックして手順 1 から手順 7 までを繰り返します。

7. プロファイルにディスクパーティションを追加します。

手順については、66 ページの「ディスクパーティションの追加」を参照してください。

ディスクパーティションの追加

少なくとも、/ パーティションと 1 つのスワップパーティションを定義する必要があります。

注 – このステップは繰り返し行うプロセスです。「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウから、パーティションを必要な数だけ追加、編集、削除することができます。パーティションを設定したら、「次へ」をクリックしてクライアント構成オプションに移動します。

ここに記載する手順では、ブートローダーパラメータの設定手順でプロファイルの追加手順を完了していることを前提とします。「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウを表示します。

ディスクパーティションを定義する手順は、次のとおりです。

1. 「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウから「追加」をクリックします。

「パーティションのオプション」テーブルが表示されます。使用している OS に該当する図を参照してください。

- Sun JDS には、図 2-46 を参照してください。
- SuSE および Red Hat には、図 2-47 を参照してください。
- Solaris x86 の場合は、図 2-48 を参照してください。

パーティションのオプション

マウントポイント: /

ファイルシステムのタイプ: ext3

サイズ (MB): 0

☒ 固定サイズ

☐ ディスクの未使用の容量をすべて使用

☐ 適切なサイズの自動判定

特定のドライブにパーティションを作成: /dev/sda

新規マウントディレクトリの追加

ディスクドライブの追加

保存 取消し

図 2-46 Sun JDS - 「パーティションのオプション」 テーブル

図 2-47 SuSE および Red Hat - 「パーティションのオプション」 テーブル

図 2-48 Solaris x 86 - 「パーティションのオプション」 テーブル

2. 下記のパラメータを設定します。

■ 「マウントポイント」

プルダウンメニューに新規マウントディレクトリを追加するには、右側の「新規マウントディレクトリの追加」をクリックします。「新規マウントポイントの定義」テーブルが表示されます。新規マウントの名前を入力して、「保存」をクリックします。新規マウントポイントが追加された「パーティションのオプション」テーブルが表示されます。

■ 「ファイルシステムのタイプ」

■ 「サイズ」 - 次のように OS に合ったサイズパラメータを定義します。

Sun JDS OS

- 「パーティションのサイズ (MB)」 メガバイト単位でサイズを入力します。
- ラジオボタンをクリックして、次のいずれかを選択します。

- パーティションを固定サイズに制限する。
- パーティションが、ハードディスクドライブ上のすべての未割り当て領域を使用することを許可する。
- サイズを自動的に決定する (/boot および swap のみ)。

SuSE および Red Hat OS

- 「パーティションのサイズ (MB)」メガバイト単位でサイズを入力します。
- ラジオボタンをクリックして、次のいずれかを選択します。
 - パーティションを固定サイズに制限する。
 - パーティションが、ハードディスクドライブ上のすべての未割り当て領域を使用することを許可する。
 - パーティションが最大サイズまで拡張することを許可し、最大サイズ (メガバイト単位) を設定する。

Solaris x86 OS

- 「パーティションのサイズ (MB)」メガバイト単位でサイズを入力します。
- ラジオボタンをクリックして、次のいずれかを選択します。
 - パーティションを固定サイズに制限する。
 - パーティションが、すべての未割り当て領域を使用することを許可する。

ディスクパーティションのパラメータ値の例を次に示します。

パラメータ	root パーティション	スワップパーティション	/
マウントポイント	/home	スワップ	/
ファイルシステムの タイプ	ufs	スワップ	ufs
パーティションのサ イズ	5000	2040	ディスク入力

3. ディスクドライブまたはスライスを「パーティションのオプション」テーブルから選択します。

この手順は、次のように OS によって異なります。

- **Sun JDS、SuSE、および Red Hat** の場合：プルダウンメニューからドライブを選択します。
プルダウンメニューに新規ディスクドライブを追加するには、右側の「ディスクドライブの追加」をクリックします。
- **Solaris x86** の場合：プルダウンメニューからパーティションに使用するスライスを選択します。

プルダウンメニューに新規ディスクスライスを追加するには、右側の「ディスクスライスの追加」をクリックします。「新規ディスクドライブの定義」テーブルが表示されます。新規ディスクスライスの名前を入力して、「保存」をクリックします。

4. 「保存」をクリックします。

「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウが表示されます。

手順 1 から手順 4 までを繰り返して、必要な数だけディスクパーティションを追加します。

必要に応じて、「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウの「編集」および「削除」機能を使用します。

パーティションの編集

- パーティションを編集するには、そのパーティションの横のチェックボックスをクリックしてから「編集」をクリックします。

「パーティションのオプション」テーブルが表示されます。このテーブルのオプションでパーティションを修正して、「保存」をクリックします。

パーティションの削除

- パーティションを削除するには、そのパーティションの横のチェックボックスをクリックしてから「削除」をクリックします。

選択ウィンドウが更新され、リストからパーティションが削除されます。

注 – このタスクについては確認ダイアログがないため、パーティションに間違いがないかどうか確認してから削除してください。

ディスクドライブの編集 (Sun JDS 専用)

- ディスクドライブを編集するには、そのドライブを選択してからドライブの横にある「処理」列の鉛筆アイコンをクリックします。

「ディスクドライブのオプション」テーブルが表示されます。このテーブルのオプションでドライブを修正して、「保存」をクリックします。

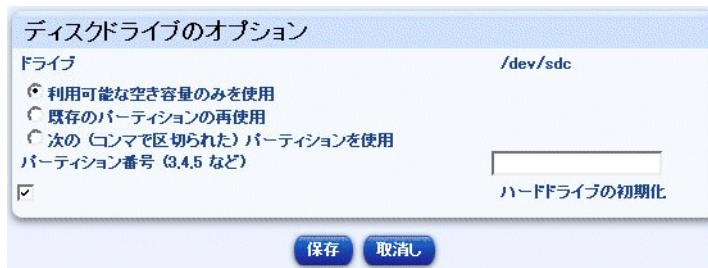


図 2-49 「ディスクドライブのオプション」 テーブル

ディスクドライブの削除 (Sun JDS 専用)

- ディスクドライブを削除するには、そのドライブを選択してからドライブの横にある「処理」列の削除アイコンをクリックします。

新規スライスの追加 (Solaris x86 専用)

- 新規スライスを追加する手順は、次のとおりです。
 - a. 「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウから「追加」をクリックします。
「パーティションのオプション」テーブルが表示されます。
 - b. 下記のパラメータを設定します。
 - 「ディスクスライス」 - プルダウンメニューからスライスを選択します。
 - サイズを入力します。
 - 「固定サイズ」
 - 「ディスクの未使用の容量をすべて使用」
 - c. 「保存」をクリックします。
- 5. OS に該当するプロファイルを追加する手順に戻り、次に進みます。
「ディスクパーティションの情報」選択ウィンドウが表示されます。次に行うべき手順は、クライアント設定情報の追加です。OS に該当する手順に戻ります。
 - 39 ページの「Sun Java Desktop System プロファイルの追加」手順 10 に進みます。
 - 46 ページの「SuSE プロファイルの追加」手順 11 に進みます。
 - 52 ページの「Red Hat プロファイルの追加」手順 14 に進みます。
 - 59 ページの「Solaris x86 プロファイルの追加」手順 8 に進みます。

プロファイルの表示

プロファイルに関する情報を表示する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「プロファイル」を選択します。
「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます。
2. プロファイルをクリックして選択します。
3. 「表示」をクリックします。
「詳細なプロファイル表示」テーブルが表示され、プロファイルに関するすべてのパラメータが提示されます。
4. 「完了」をクリックすると、「AllStart ペイロード」テーブルに戻ります。

プロファイルの修正

プロファイルを変更する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「プロファイル」を選択します。
「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます。
2. プロファイルをクリックして選択します。
3. 「変更」をクリックします。
「AllStart プロファイルの変更」テーブルが表示されます。以降の手順は、プロファイルの追加に使用する画面と同じ画面での操作になります。
「タスクの進捗状況」ダイアログにタスクの完了が表示されます。

プロファイルの削除

プロファイルを削除する手順は、次のとおりです。

注 – プロファイルがクライアントを参照している場合には、そのプロファイルを削除できません。まず、該当するクライアントを修正または削除する必要があります。

1. 「AllStart」→「プロファイル」を選択します。
「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます。
2. プロファイルをクリックして選択します。上の「すべてを選択」をクリックすれば、リスト内のすべてのプロファイルを選択できます。

3. 「削除」をクリックします。

- プロファイルがクライアントを参照している場合は、そのプロファイルを削除できません。
- プロファイルがクライアントを参照していない場合は、ダイアログが表示され、削除の確認を行います。

「タスクの進捗状況」ダイアログにタスクの完了が表示されます。

プロファイルの複製

複製は、既存プロファイルの正確なコピーを別名で作成できます。これは、似たようなプロファイルを作成するときに便利です。

注 – 現在のプロファイル設定の詳細を表示する手順については、72 ページの「プロファイルの表示」を参照してください。

プロファイルを複製する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「プロファイル」を選択します。

「AllStart プロファイル」テーブルが表示されます。

2. プロファイルをクリックして選択します。

3. 「複製」をクリックします。

複製対象のプロファイル名とその説明が「プロファイルの複製」テーブルに表示されます。



プロファイルの複製	
プロファイル名	sjds-profile-clone
プロファイルの説明	sjds profile

保存 取消し

図 2-50 「プロファイルの複製」テーブル

4. 必要に応じて次のフィールドを変更します。

- 「プロファイル名」 - それぞれのプロファイルについて、一意の、記述的な名前を入力します。

注 – それぞれのプロファイルについて、一意の、記述的な名前を使用することが重要です。システムはこの名前に基づいてプロファイルを区別します。

- 「プロファイルの説明」 - そのプロファイルに関する説明を入力します。

5. 「保存」をクリックします。

プロファイルの複製が「AllStart プロファイル」テーブルに表示されていることを確認します。

クライアント

クライアントは、追加、表示、変更、または削除できます。また、クライアントを有効化または無効化できます。

図 2-51 に、「AllStart クライアント」テーブルの例を示します。

AllStart クライアント

すべてを選択

すべての選択を解除

有効	クライアントの MAC	説明	プロファイル 名	ペイロード 名	ビルド フェーズ	ビルド 時間
<input type="checkbox"/> N	000303030404	solaris_test	burlington	burlington		

追加

有効化

無効化

表示

変更

削除

ビルド状態

図 2-51 「AllStart クライアント」テーブル

新規クライアントの追加

SuSE、Red Hat、および Sun JDS クライアントを追加する手順は、次のとおりです。Solaris x86 クライアントを追加する手順は、79 ページの「新規 Solaris x86 クライアントの追加」を参照してください。

新規クライアントは、手動で追加、新規自動検出クライアントを追加、Sun Control Station 内にすでに存在する管理対象ホストの一覧から新規クライアントを選択、または XML フォーマットファイル内のクライアントの一覧からインポートできます。

クライアントをすぐに使用するには、必ず管理対象ホスト以外のクライアントをそれぞれ有効にしてください。管理対象ホストは自動的に有効になります。

また、DHCP 設定を有効にする必要があります。92 ページの「DHCP 設定の修正」を参照してください。

注 – そのクライアントが管理対象ホストでない限り、クライアントは「AllStart クライアント」テーブルに追加してから有効にする必要があります。管理対象ホストは自動的に有効になります。クライアントが有効にされていないと、AllStart モジュールはそのクライアントの MAC アドレスと IP アドレスに対応するサーバーがネットブートしてもペイロードを提供しません。

新規クライアントを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「クライアント」を選択します。
「AllStart クライアント」テーブルが表示されます。
2. 下の「追加」をクリックします。
「システムタイプの選択」テーブルが表示されます。
3. 次のタイプを選択します。
redhat、solaris、sjds、または suse
4. 「次へ」をクリックします。
「AllStart クライアントの作成」テーブルが表示されます。

図 2-52 「AllStart クライアントの作成」テーブル

5. 次のパラメータを設定します。

注 – ペイロードとプロファイルのインストールに使用されるネットワークインタフェースカード (NIC) の MAC アドレスを入力する必要があります。

- 「MAC アドレス」 - 新規クライアントの MAC アドレスを入力します。
- 「インストールのタイプ」 - インストールのタイプを NFS または HTTP から選択します。Solaris のクライアントには NFS を選択します。
- 「シリアルコンソール」 - 使用するコンソールポートを選択します。
- 「シリアルコンソールのボーレート」 - コンソールのボーレートを選択します。
- 「ペイロード」 - インストールするペイロードの名前を選択します。
- 「プロファイル」 - インストールするプロファイルの名前を選択します。

6. テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「インストールのブート情報を構成」テーブルが表示されます (図 2-53 を参照)。インストール中に別のブート設定を行うには、以上のオプションを使用します。

図 2-53 「インストールのブート情報を構成」テーブル

7. 下記のパラメータを設定します。

- 「ブートのタイプ」
- 「カーネルパラメータ」

注 – Sun JDS クライアントを作成している場合、次のカーネルパラメータを指定する必要があります。

Sun™ LX50 サーバーの場合：引数 `acpi=OFF` を追加します。(これは Advanced Configuration and Power Interface (ACPI) 機能をオフにします。)

ホワイトボックスサーバー全体の場合：引数 `apm=OFF` を追加します。(これは Advanced Power Management (APM) 機能をオフにします。)

- 「ネットワークデバイスのインストール」 - ネットワークデバイスを選択します。eth0 または eth1 から選択してください。

注 - Sun Fire V60x サーバーまたは V65x サーバーでは、インストールは 2 つのビルトイン NIC のどちらかで行う必要があります。

- 「IP アドレスのインストール」 - 新規クライアントの IP アドレスを入力します。
- 「ネットマスク」
- 「ゲートウェイ」
- 「ホスト名」
- 「ネームサーバー」

8. テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「ネットワークインタフェース」テーブルが表示されます (図 2-54 を参照)。

このテーブルでは、クライアントの NIC に関する情報を設定します。

9. 下の「ネットワークインタフェースの追加」をクリックします。

「ネットワークインタフェース情報の入力」テーブルが表示されます (図 2-55 を参照)。

10. 下記のパラメータを設定します。

- 「ネットワークデバイス」
- 「ネットワークのタイプ」
 - 「静的」を選択した場合は、下記のフィールドに入力する必要があります。
 - 「DHCP」を選択した場合は、テーブルの下の「保存」をクリックします。
- 「IP アドレス」
- 「ネットマスク」
- 「ゲートウェイ」
- 「ホスト名」
- 「ネームサーバー」

11. テーブルの下にある「保存」をクリックします。

「ネットワークインタフェース」テーブルが更新され、新規デバイスが追加されます。

12. 次に、ほかのデバイスの追加、または既存のデバイスに関するその他のオペレーションを実行することができます。

- ほかのデバイスを追加するには、下の「ネットワークインタフェースの追加」をクリックします。「ネットワークインタフェース情報の入力」テーブルが表示されます。
- 既存のデバイスの設定を編集するには、そのデバイスの横の「処理」列にある鉛筆アイコンをクリックします。「ネットワークインタフェース情報の入力」テーブルが表示されます。

- 既存のデバイスをリストから削除するには、そのデバイスの横の「処理」列にある削除アイコンをクリックします。テーブルが更新され、デバイスが削除されます。

注 – このタスクについては確認ダイアログがないため、デバイスに間違いがないかどうか確認してから削除してください。

13. ネットワークインタフェースの設定が完了したら、テーブルの下の「保存」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

ネットワークインタフェース							
「追加」をクリックして、インストール後に構成するネットワークインタフェースを入力します。適切なアイコンをクリックして、完全な情報を編集、削除、または表示します。							
デバイス	静的 / IP	IP	ネットマスク	ゲートウェイ	ホスト名	ネームサーバー	処理
eth6	static	10.6.147.53	255.255.255.0	10.6.147.1	supriyamula	10.6.147.254	 
eth7	static	10.6.47.63	255.255.255.0	10.6.47.1	brendamula	10.6.47.254	 
eth9	static	10.6.73.28	255.255.255.0	10.6.73.1	jeffbilicki	10.6.73.254	 
eth8	static	10.9.47.21	255.255.255.0	10.9.47.1	natebilicki	10.9.47.254	 

ネットワークインタフェースの追加

<< 前へ 保存 取消し

図 2-54 「ネットワークインタフェース」テーブル

ネットワークインタフェース情報の入力	
ネットワークデバイス	<input type="text" value="eth0"/>
ネットワークのタイプ	<input checked="" type="radio"/> Static IP <input type="radio"/> DHCP
IP アドレス	<input type="text"/>
ネットマスク	<input type="text"/>
ゲートウェイ	<input type="text"/>
ホスト名	<input type="text"/>
ネームサーバー	<input type="text"/>

保存 取消し

図 2-55 「ネットワークインタフェース情報の入力」テーブル

新規 Solaris x86 クライアントの追加

注 – 自動検出のクライアントと管理対象ホストのクライアントは、Solaris x86 ではサポートされていません。

新規 Solaris クライアントを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「クライアント」を選択します。
「AllStart クライアント」テーブルが表示されます。



図 2-56 「AllStart クライアント」テーブル

2. 下の「追加」をクリックします。
「システムタイプの選択」テーブルが表示されます。
3. 次のタイプを選択します。
solaris
4. 「次へ」をクリックします。
「AllStart クライアントの作成」テーブルが表示されます。

AllStart クライアントの作成	
MAC アドレス	00083D006D6A
説明	solaris build
インストールのタイプ	nfs
シリアルコンソール	None
シリアルコンソールのボーレート	9600
ペイロード	solar_pay
プロファイル	solaris-profile

次へ >> 取消し

図 2-57 「AllStart クライアントの作成」 テーブル

5. 下記のパラメータを設定します。

注 – ペイロードとプロファイルのインストールに使用されるネットワークインタフェースカード (NIC) の MAC アドレスを入力する必要があります。

- 「MAC アドレス」 - 新規クライアントの MAC アドレスを入力します。
- 「説明」 - そのクライアントに関する説明を入力します。
- 「インストールのタイプ」 - インストールのタイプを選択します。Solaris クライアントには NFS を選択します。
- 「シリアルコンソール」 - 使用するコンソールポートを選択します。
- 「シリアルコンソールのボーレート」 - コンソールのボーレートを選択します。
- 「ペイロード」 - インストールするペイロードの名前を選択します。
- 「プロファイル」 - インストールするプロファイルの名前を選択します。

6. テーブルの下にある「次へ」をクリックします。

「インストールのブート情報を構成」テーブルが表示されます (図 2-58 を参照)。インストール中に別のブート設定を行うには、以上のオプションを使用します。

インストールのブート情報を構成します。
 次の値は、インストール目的のブート時に使用されます。
 この値は、インストール後、ネットワーク設定にも反映されます。

ブートのタイプ	PXE Boot
ブートパス	v20x (bottom) ブートパスを追加
IP アドレスのインストール	255.0.0.10
ネットマスク	255.255.255.0
ゲートウェイ	255.1.1.1
ホスト名	solaris-100
ネームサーバー	255.1.1.10
ドメイン	sun.com

<< 前へ 保存 取消し

図 2-58 「インストールのブート情報を構成」 テーブル

7. 次のブートパラメータを設定します。

注 – Solaris x86 に定義できるブート/ネットワークインタフェースは、1 つだけです。

- 「ブートのタイプ」
- 「ブートパス」 - スクロールリストからブートパスを選択します。

スクロールリストにブートパスを追加するには、「ブートパスを追加」をクリックしてエイリアス名とブートパスを入力します。たとえば、次のように入力します。

- 「ブートパスのエイリアス名」 v20
- 「ブートパス」 /pci@0,0/pci1022,7450@a/pci17c2,10@2a
- 「ブートパスのエイリアス名」 v60
- 「ブートパス」 /pci@0,0/pci8086,
2545@3/pci8086,1460@1f/pci8086,341@7,1

注 – v60 ブートパスは v65 に、v20 ブートパスは v40 に有効です。

- 「IP アドレスのインストール」 - 新規クライアントの IP アドレスを入力します。
- 「ネットマスク」
- 「ゲートウェイ」
- 「ホスト名」
- 「ネームサーバー」
- 「ドメイン」

8. テーブルの下にある「保存」をクリックします。

「タスクの進捗状況」 ダイアログが表示されます。

新規自動検出クライアントの追加

注 – このオプションは、96 ページの「自動検出機能」と関連して機能します。97 ページの「クライアントの自動検出向け設定」の手順は、自動検出クライアントで利用される IP アドレスの範囲の指定に使用します。

AutoDiscovery 機能により、サーバーが DHCP サーバーから IP アドレスを取得して、PXE ブートサーバーからその IP アドレスに対するデフォルトのペイロードを取得できます。この機能は、特にクライアントの MAC アドレスが不明な場合に役立ちます。

自動検出機能の設定方法の詳細は、96 ページの「自動検出機能」を参照してください。

新規自動検出クライアントを追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「クライアント」を選択します。
「AllStart クライアント」テーブルが表示されます。
2. 下の「追加」をクリックします。
「システムタイプの選択」テーブルが表示されます。
3. 次のタイプを選択します。
redhat、solaris、sjds、または suse
4. 「次へ」をクリックします。
「AllStart クライアントの作成」テーブルが表示されます。
5. テーブルの上にあるプルダウンメニューから、「クライアントの自動検出の追加」を選択します。
「クライアントの自動検出」テーブルが表示されます (図 2-59 を参照)。
6. 下記のパラメータを設定します。
 - 「クライアント名」(クライアント名には自動的に接頭辞 default- が付けられます)
 - 「サブネット」- クライアントが常駐するサブネットを選択します。
 - 「インストールのタイプ」- インストールのタイプを選択します。NFS または HTTP から選択します。
 - 「シリアルコンソール」- 使用するコンソールポートを選択します。
 - 「シリアルコンソールのボーレート」- コンソールのボーレートを選択します。
 - 「ネットワークデバイスのインストール」- ネットワークデバイスを選択します。
eth0 または eth1 から選択してください。

注 – Sun Fire V60x サーバーまたは V65x サーバーでは、インストールは 2 つのビルトイン NIC のどちらかで行う必要があります。

- 「カーネルパラメータ」
- 「ペイロード」 - インストールするペイロードの名前を選択します。
- 「プロファイル」 - インストールするプロファイルの名前を選択します。

7. テーブルの下にある「保存」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

図 2-59 「クライアントの自動検出」テーブル

管理対象ホストのクライアントとしての追加

Sun Control Station にすでにホストをインポートしている場合、AllStart クライアントとして追加する管理対象ホストを選択できます。

注 – 管理対象ホストは自動的に有効になります。

管理対象ホストをクライアントとして追加する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」 → 「クライアント」 を選択します。
「AllStart クライアント」 テーブルが表示されます。
2. 下の「追加」をクリックします。
「システムタイプの選択」 テーブルが表示されます。
3. 次のタイプを選択します。
redhat、solaris、sjds、または suse
4. 下の「続行」をクリックします。
「AllStart クライアントの作成」 テーブルが表示されます。
5. テーブルの上にあるプルダウンメニューから、「管理ホストをクライアントとして追加」を選択します。
「管理ホストからの AllStart クライアントの追加」 テーブルが表示されます。
6. 管理対象ホストをクリックして選択します。
追加できるのは、一度に 1 つの管理対象ホストだけです。
7. 右下の「追加」をクリックします。
「AllStart クライアントの作成」 テーブルが表示されます。
8. 下記のパラメータを設定します。

注 – 管理対象ホストはすでにネットワークに接続され、IP アドレスを割り当てられている必要があります。また、MAC アドレスフィールドにも、すでに値が設定されているはずです。これら 2 つのパラメータは変更できません。

- 「インストールのタイプ」 - インストールのタイプを選択します。NFS または HTTP から選択します。
 - 「シリアルコンソール」 - 使用するコンソールポートを選択します。
 - 「シリアルコンソールのボーレート」 - コンソールのボーレートを選択します。
 - 「ペイロード」 - インストールするペイロードの名前を選択します。
 - 「プロファイル」 - インストールするプロファイルの名前を選択します。
9. テーブルの下にある「保存」をクリックします。
「タスクの進捗状況」 ダイアログが表示されます。

クライアントリストのインポート

XML 形式のファイルにクライアントのリストを記述してインポートすることもできます。正しい形式については、85 ページの「クライアントリストの XML 書式」を参照してください。

クライアントリストのファイルをインポートする手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」 → 「クライアント」 を選択します。
「AllStart クライアント」 テーブルが表示されます。
2. 下の「追加」をクリックします。
「システムタイプの選択」 テーブルが表示されます。
3. 次のタイプを選択します。
redhat、solaris sjds、または suse
4. 「続行」をクリックします。
「AllStart クライアントの作成」 テーブルが表示されます。
5. テーブルの上にあるプルダウンメニューから、「ファイルからのクライアントの追加」を選択します。
「ファイルからのクライアント定義の読み込み」 テーブルが表示されます。
6. XML ファイルへのパスとファイル名を入力するか、ボタンをクリックしてファイルを指定します。
7. テーブルの下にある「クライアントの作成」をクリックします。
「タスクの進捗状況」 ダイアログが表示されます。

クライアントリストの XML 書式

ここでは、クライアントのリストを含む XML 形式のファイルの書式について、例を挙げて説明します。

ファイル名の拡張子は、.xml です。

以下のファイル例には、2つのクライアントに関する情報が含まれています。1つ目のクライアントに2つのネットワークデバイスを持ち、それぞれ DHCP と静的 IP アドレスで識別されます。2つ目のクライアントに1つのネットワークデバイスがあり、静的 IP アドレスで識別されます。

ファイル例

```
<clients>
  <client>
    <mac value = "00:03:47:D5:74:7A"/>
    <install_type value = "http"/>
    <console value = "none"/>
    <console_baud value = "9600"/>
    <payload value = "sjds"/>
    <profile value = "sjds"/>
    <network>
      <device value = "eth0"/>
      <bootproto value = "dhcp"/>
    </network>
  </client>
</clients>
```

```

        <device value = "eth1"/>
        <bootproto value = "static"/>
        <ip value = "192.168.0.3"/>
        <netmask value = "255.255.255.0"/>
        <gateway value = "192.168.0.1"/>
        <hostname value = "bmula3.sfbay.sun.com"/>
        <nameserver value = "192.168.0.1"/>
    </network>
    <boot>
        <boottype value = "pxe"/>
        <device value = "eth0"/>
        <ip value = "192.168.0.3"/>
        <netmask value = "255.255.255.0"/>
        <kernel_params value = "acpi=off"/>
        <hostname value = "bmula3.sfbay.sun.com"/>
        <gateway value = "192.168.0.1"/>
    </boot>
</client>
<client>
    <mac value = "00:10:4B:0F:93:75"/>
    <install_type value = "http"/>
    <console value = "none"/>
    <console_baud value = "9600"/>
    <payload value = "sjds"/>
    <profile value = "sjds"/>
    <network>
        <device value = "eth0"/>
        <bootproto value = "static"/>
        <ip value = "10.1.10.60"/>
        <netmask value = "255.255.255.0"/>
        <gateway value = "10.1.10.1"/>
        <hostname value = "bmula6.sfbay.sun.com"/>
        <nameserver value = "10.1.10.1"/>
    </network>
    <boot>
        <boottype value = "pxe"/>
        <device value = "eth0"/>
        <ip value = "10.1.10.60"/>
        <netmask value = "255.255.255.0"/>
        <kernel_params value = "acpi=off"/>
        <hostname value = "test.central.sun.com"/>
        <gateway value = "10.1.10.1"/>
    </boot>
</client>
</clients>

```

クライアントの有効化

「AllStart クライアント」テーブルの左端の列は「有効」で、そのクライアントが有効化されていれば「Y」が、有効化されていなければ「N」が表示されます。

クライアントが有効化されていて、ビルドが開始されていれば、「有効」列に「B」が表示されます。

注 – 再起動するとビルドを開始できるようクライアントのブートローダーが変更されるため、管理対象ホストは自動的に有効になります。DHCP でクライアントを PXE/ネットブートするには、この手順でクライアントを再度有効にする必要があります。

有効化されていないクライアントを有効にする手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「クライアント」を選択します。
「AllStart クライアント」テーブルが表示されます。
2. クライアントをクリックして選択します。上の「すべてを選択」をクリックすれば、リスト内のすべてのクライアントを選択できます。
3. 下の「有効化」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

「AllStart クライアント」テーブル上で、選択したクライアントの「有効」列に「Y」が表示されます。

情報メッセージが表示され、DHCP が有効になります。92 ページの「DHCP 設定の修正」を参照してください。

クライアントの無効化

「AllStart クライアント」テーブルの左端の列は「有効」で、そのクライアントが有効化されていれば「Y」が、有効化されていなければ「N」が表示されます。

クライアントが有効化されていて、ビルドが開始されていれば、「有効」列に「B」が表示されます。

有効化されているクライアントを無効にする手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「クライアント」を選択します。
「AllStart クライアント」テーブルが表示されます。
2. クライアントをクリックして選択します。上の「すべてを選択」をクリックすれば、リスト内のすべてのクライアントを選択できます。
3. 下の「無効化」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

「AllStart クライアント」テーブル上で、選択したクライアントの「有効」列に「Y」が表示されます。

クライアントの表示

クライアントに関する情報を表示する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「クライアント」を選択します。
「AllStart クライアント」テーブルが表示されます。
2. クライアントをクリックして選択します。
3. 右下の「表示」をクリックします。
「AllStart クライアントの表示」テーブルに、次の情報が表示されます。
 - 「MAC アドレス」
 - 「IP アドレス」
 - 「クライアントが有効 (Y/N)」
 - 「ネットワークデバイスのインストール」
 - 「シリアルコンソール」
 - 「シリアルコンソールのボーレート」
 - 「ブートローダー」
 - 「カーネルパラメータ」
 - 「インストールのタイプ」
 - ペイロードの名前
 - プロファイルの名前
 - デバイス情報
4. 「完了」をクリックすると、「AllStart クライアント」テーブルに戻ります。

クライアントの修正

クライアントを修正する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「クライアント」を選択します。
「AllStart クライアント」テーブルが表示されます。
2. クライアントをクリックして選択します。
3. 右下の「変更」をクリックします。
追加したクライアントのタイプに応じたテーブルが表示され、修正できます。
たとえば、自動検出クライアントを修正する場合は、「クライアントの自動検出」テーブルが表示されます。単一の新規クライアントとして追加されたクライアントを修正する場合は、「AllStart クライアントの変更」テーブルが表示されます。
以降の手順は、クライアントの追加に使用する画面と同じ画面での操作になります。表示される画面については、修正するクライアントのタイプごとのクライアント追加手順を参照してください。
74 ページの「新規クライアントの追加」を参照してください。

クライアントの削除

クライアントを削除する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「クライアント」を選択します。
「AllStart クライアント」テーブルが表示されます。
2. クライアントをクリックして選択します。上の「すべてを選択」をクリックすれば、リスト内のすべてのクライアントを選択できます。
3. 右下の「削除」をクリックします。

注 – 有効化されているクライアントは、自動的に無効化されます。

ダイアログが表示され、削除の実行を確認されます。

4. 「削除」をクリックします。
「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。
「AllStart クライアント」テーブルから、クライアントが削除されます。

クライアントの構築

コントロールステーションの UI でクライアントを作成し、それを有効にすると、クライアント上でペイロードおよびプロファイルをインストールすることができるようになります。

注 – また、構築動作に対しては、「AllStart クライアント」テーブル内でクライアントエントリを有効化する必要があります。

クライアントを構築する手順は、次のとおりです。

1. クライアントを構成してネットワークから起動します。
2. クライアントを再起動します。
クライアントは Sun Control Station からペイロードとプロファイルを受け取ります。

注 – インストールは、Sun Control Station からクライアントへの、アクティブな「push」操作ではありません。クライアントは、Control Station から、ペイロードとプロファイルを「pull」しなければなりません。つまり、「AllStart クライアント」テーブル内のクライアントエントリに従って、クライアントはペイロードとプロファイルを受け取ることになります。

クライアントのビルドステータスの表示

AllStart が現在ビルドされているクライアントのステータスを表示できます。

クライアントのビルドステータスを表示する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「クライアント」を選択します。
「AllStart クライアント」テーブルが表示されます。
2. クライアントをクリックして選択します。上の「すべてを選択」をクリックすれば、リスト内のすべてのクライアントを選択できます。
3. 右下の「ビルド状態」をクリックします。
「AllStart クライアントの表示」テーブルが表示されます。このテーブルには、クライアントについて、ペイロードの名前、ビルドの現在のフェーズ、エラーが発生した場合はその説明、ビルドに要した時間などが表示されます。
4. 「完了」をクリックすると、「AllStart クライアント」テーブルに戻ります。

サービス

次のサービスに対する設定を表示できます。

- DHCP
- NFS
- HTTP
- クライアントを常にネットブートする

NFS と HTTP は、常に有効化されていなくてはなりません。これら 2 つのサービスは無効化できません。

DHCP 設定は修正可能です。

クライアントを常にネットブートする

旧式パソコンの中には、初期ブートで PXE ブートに対するキーシーケンスを持たないものもあります。あるいは、ユーザーがいない場所で PXE ブートを開始する場合もあります。「クライアントを常にネットブートする」オプションを使用すると、パソコンの BIOS 設定を変更してから、クライアントを有効化してビルドを開始できます。

「クライアントを常にネットブートする」機能を有効にすると、マシンがネットワークからブートされるようになります。すると、クライアントを構築すべきかどうか、クライアントがすでに構築されていればクライアントのハードディスクドライブからブートするかどうかを AllStart モジュールソフトウェアが決定します。

この機能を有効化する手順については、96 ページの「「クライアントを常にネットブートする」機能の有効化」を参照してください。

DHCP 情報の参照

現在の DHCP 情報を表示する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「サービス」を選択します。
「現在のサービス設定」テーブルが表示されます。

現在のサービス設定	
DHCP が有効	N
NFS が有効	Y
HTTP が有効	Y
クライアントを常にネットブートする	N

[DHCP 情報の表示](#) [変更](#)

図 2-60 「現在のサービス設定」テーブル

2. テーブルの下にある「DHCP 情報の表示」をクリックします。
「追加の DHCP 設定」テーブルが表示されます。それぞれのエントリについて、ネットワーク、ネットワークマスク、IP アドレスの範囲がテーブルに表示されます。
3. エントリをクリックして選択します。
4. 右下の「詳細」をクリックします。
「詳細な DHCP 設定」テーブルが表示されます。テーブルには、次の情報が表示されます。

- 「ネットワーク」
 - 「ネットマスク」
 - 「IP 範囲」
 - 「ルーター」
 - 「DNS サーバー」
 - 「DNS サーバー 2」
 - 「DNS サーバー 3」
 - 「ドメイン」
 - 「ドメイン 2」
5. 「完了」をクリックすると、「追加の DHCP 設定」テーブルに戻ります。
 6. 「前へ」をクリックすると、「現在のサービス設定」テーブルに戻ります。

DHCP 設定の修正

DHCP 設定を修正する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「サービス」を選択します。
「現在のサービス設定」テーブルが表示されます。
2. テーブルの下にある「変更」をクリックします。
「サービス設定の変更」テーブルが表示されます。

注 - NFS と HTTP は無効化できません。

サービス設定の変更	
DHCP が有効	<input type="checkbox"/>
DHCP インタフェース	eth0 ▼
NFS が有効	Y
HTTP が有効	Y
クライアントを常にネットブートする	<input type="checkbox"/>

保存 DHCP 情報の変更 取消し

図 2-61 「サービス設定の変更」テーブル

3. 下記のパラメータを設定できます。
 - 「DHCP が有効」 - このチェックボックスをクリックすると、DHCP サービスを有効化/無効化できます。
 - 「DHCP インタフェース」 - プルダウンメニューから、eth0 または eth1 を選択します。

- 「クライアントを常にネットブートする」 - このチェックボックスをクリックすると、有効化/無効化できます。

4. DHCP 情報を修正するには、テーブルの下「DHCP 情報の変更」をクリックします。

「DHCP 設定の変更」テーブルが表示されます。このウィンドウで、新規 DHCP 情報の追加、既存 DHCP 情報の修正、または DHCP 情報の削除ができます。

- 新規 DHCP 情報を追加するには、93 ページの「新規 DHCP 情報の追加」を参照してください。
- DHCP 情報を修正するには、94 ページの「DHCP 情報の修正」を参照してください。
- DHCP 情報を削除するには、95 ページの「DHCP 情報の削除」を参照してください。

注 - DHCP 情報に対する変更を行うときは、必ず最後に「保存」をクリックしてください。保存しないと、変更は有効になりません。

5. 「保存」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

新規 DHCP 情報の追加

注 - 「DHCP 設定の変更」ページで、アドレス範囲について IP アドレスの下端と上端を選択する場合、

Sun Control Station サーバーの IP アドレスは IP アドレスの範囲内にできません。

ネットワークのブロードキャストアドレス (192.168.0.255 など) はそのアドレスの範囲内にできません。

アドレス範囲の下端と上端の両方に同じ IP アドレスを入力することはできません。

あるバージョンの DHCP では、リストされているアドレス範囲の最初の IP アドレスも最後の IP アドレスも使用しません。そこで、IP アドレスを 1 つだけ含む有効な範囲の例は、次のようになります。

10.1.10.100 - 10.1.10.102

6. 「DHCP 設定の変更」選択ウィンドウで「追加」をクリックします。

「新規 DHCP 設定の追加」テーブルが表示されます (図 2-62 を参照)。下に示すフィールドを設定します。

- 「ネットワーク」
 - 「ネットマスク」
 - 「IP 範囲」(最初のフィールドには下位 IP アドレスを、2 つ目のフィールドには上位 IP アドレスを入力します。)
 - 「ルーター」
 - 「DNS サーバー」
 - 「DNS サーバー 2」
 - 「DNS サーバー 3」
 - 「ドメイン」
 - 「ドメイン 2」
7. 「保存」をクリックします。

「DHCP 設定の変更」テーブルが表示され、新規 DHCP 情報に関するエントリが提示されます。

The image shows a dialog box titled "新規 DHCP 設定の追加" (Add New DHCP Setting). It contains a list of labels on the left and corresponding input fields on the right:

- ネットワーク (Network)
- ネットマスク (Netmask)
- IP 範囲 (IP Range)
- ルーター (Router)
- DNS サーバー (DNS Server)
- DNS サーバー 2 (DNS Server 2)
- DNS サーバー 3 (DNS Server 3)
- ドメイン (Domain)
- ドメイン 2 (Domain 2)

At the bottom of the dialog box, there are two buttons: "保存" (Save) and "取消し" (Cancel).

図 2-62 「新規 DHCP 設定の追加」テーブル

DHCP 情報の修正

8. テーブル内でエントリをクリックして選択します。
9. 「DHCP 設定の変更」選択ウィンドウで「編集」をクリックします。

注 - 93 ページの「新規 DHCP 情報の追加」の注を参照してください。

「DHCP 設定の変更」テーブルが表示されます。ネットワークとネットマスクに関する情報は、すでに設定されています。

次の情報を編集します。

- 「IP 範囲」(最初のフィールドには下位 IP アドレスを、2 つ目のフィールドには上位 IP アドレスを入力します。)
- 「ルーター」
- 「DNS サーバー」
- 「DNS サーバー 2」
- 「DNS サーバー 3」
- 「ドメイン」
- 「ドメイン 2」

10. 「保存」をクリックします。

「DHCP 設定の変更」テーブルが表示されます。

DHCP 情報の削除

11. テーブル内でエントリをクリックして選択します。

12. 「DHCP 設定の変更」選択ウィンドウで「削除」をクリックします。

ダイアログが表示され、削除の実行を確認されます。

13. 「削除」をクリックします。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

「DHCP 設定の変更」選択ウィンドウから、DHCP 情報のエントリが削除されます。

14. 「前へ」をクリックすると、「サービス設定の変更」テーブルに戻ります。

15. 変更内容を有効にするには、テーブルの下の「保存」をクリックします。

注 – この段階で「保存」をクリックしないと、DHCP 情報に対する変更が保存されず、有効になりません。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

「クライアントを常にネットブートする」機能の有効化

「クライアントを常にネットブートする」機能を有効にする手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」の GUI から、「サービス」をクリックして「変更」を選択します。
2. 「クライアントを常にネットブートする」をクリックします。
3. 「ディストリビューション」、「ペイロード」、「プロファイル」、「クライアント」を定義します。
4. 「Client Hardware Box」に進み、「Setup」を押します。
5. 「Client Hardware Box」を「Always Boot from Network」に設定します。
このオプションは、ベンダーのハードウェアによって異なります。
6. クライアントマシンを起動します。
クライアントが構築を開始すると、「クライアント」画面の「有効」状態にビルドの「B」が表示されます。
7. (省略可能) 別のビルドを開始するには、クライアントを再度有効化します。
こうすると、「有効」状態が「Y」に戻ります。

自動検出機能

注 – この機能は、82 ページの「新規自動検出クライアントの追加」と関連して機能します。

AllStart コントロールモジュールの「自動検出」機能を使用すると、サーバーは Sun Control Station から DHCP アドレスを取得し、その DHCP アドレスに関連するデフォルトのペイロードとプロファイルを PXE ブートサーバーから取得できます。この機能は、特にクライアントの MAC アドレスが不明な場合に役立ちます。

まず、DHCP テーブルで IP アドレスの範囲を指定します。次に自動検出クライアント作成して、そのクライアントを有効化します。最後に、ホストマシンをネットブートすると、そのホストは AllStart モジュールからネットワーク情報、ペイロード、プロファイルを取得します。

クライアントの自動検出向け設定

注 – ここに記載する手順では、DHCP サーバーがすでに設定され、その DHCP サーバーが「AllStart」→「サービス」で有効化されていることを前提とします。

設定と有効化が完了していない場合は、90 ページの「サービス」を参照してください。

自動検出向けにクライアントを設定する手順は、次のとおりです。

IP アドレスの範囲を指定する

1. 「AllStart」→「サービス」を選択します。
「現在のサービス設定」テーブルが表示されます。
2. テーブルの下にある「変更」をクリックします。
「サービス設定の変更」テーブルが表示されます。
3. 「DHCP が有効」チェックボックスをクリックします。
4. プルダウンメニューから「DHCP インタフェース」を選択します。
eth0 または eth1 から選択してください。
5. テーブルの下にある「DHCP 情報の変更」をクリックします。
「DHCP 設定の変更」選択テーブルが表示されます。

注 – DHCP 情報に対する変更を行うときは、必ず最後に「保存」をクリックしてください。保存しないと、変更は有効になりません。

6. テーブル内でエントリをクリックして選択します。
7. 右下の「編集」をクリックします。
「DHCP 設定の変更」テーブルが表示されます。ネットワークとネットマスクに関する情報は、すでに設定されています。
8. 自動検出に使用する IP アドレスの範囲を入力します。
最初のフィールドには、その範囲の下位 IP アドレスを、2 つ目のフィールドには、その範囲の上位 IP アドレスを入力します。

注 – このテーブルでは、その他のフィールドに入力する必要はありません。

9. 「保存」をクリックします。
「DHCP 設定の変更」選択ウィンドウが表示されます。
10. 「前へ」をクリックすると、「サービス設定の変更」テーブルに戻ります。

11. 変更内容を有効にするには、テーブルの下「保存」をクリックします。

注 – この段階で「保存」をクリックしないと、DHCP 情報に対する変更が保存されず、有効になりません。

「タスクの進捗状況」ダイアログが表示されます。

自動検出クライアントを作成する

12. ここで、クライアントを作成します。

自動検出クライアントは複数作成できます。

自動検出クライアントを作成すると、クライアント名に自動的に接頭辞 default- が付けられます。

自動検出クライアントを作成する方法については、82 ページの「新規自動検出クライアントの追加」を参照してください。

自動検出クライアントを有効化する

13. クライアントを作成したら、次にクライアントを有効化します。

クライアントを有効化する方法については、86 ページの「クライアントの有効化」を参照してください。

ホストマシンをネットブートする

14. ネットワーク上でホストマシンをネットブートします。

ホストマシンは、作成した自動検出クライアントを通じて、ネットワーク情報とペイロードを入手します。

「詳細」

「詳細」サブメニュー項目では、次のことができます。

- Sun Java Desktop System ディストリビューションソフトウェアのインストールで使用する登録情報を入力する。
- AllStart の初期設定を選択する。

Sun JDS ソフトウェアの登録

Sun JDS ソフトウェアを登録する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「詳細」を選択します。
「登録情報」テーブルが表示されます。
2. このテーブルのフィールドに値を指定します。
3. 「保存」をクリックします。
「登録情報」テーブルが更新され、情報が正常に保存されたことを示します。

AllStart 初期設定の選択

この画面では、対象とする OS ディストリビューションだけが表示されるように、AllStart 画面をカスタマイズできます。

注 – 表示する OS ディストリビューションを 1 つだけ選択した場合は、AllStart の手順で「システムタイプの選択」選択ウィンドウが表示されません。手順が直接開始されます。

AllStart の初期設定を選択する手順は、次のとおりです。

1. 「AllStart」→「詳細」を選択します。
「登録情報」テーブルが表示されます。
2. テーブルの上にあるプルダウンメニューから、「設定の変更」を選択します。
「設定の変更」テーブルが表示されます (図 2-63 を参照)。
3. AllStart 画面に表示する OS ディストリビューションをクリックして有効にします。

4. 「保存」をクリックします。

「設定の変更」テーブルが更新され、情報が正常に保存されたことを示します。

設定の変更 ▼

設定の変更

この画面では、対象とする OS ディストリビューションのみが表示されるように画面をカスタマイズできます。

Red Hat Linux	<input checked="" type="checkbox"/>
Solaris	<input checked="" type="checkbox"/>
Sun Java [TM] デスクトップシステム	<input checked="" type="checkbox"/>
SuSE Linux	<input checked="" type="checkbox"/>

保存

図 2-63 「設定の変更」テーブル

第3章

アップグレード情報およびトラブルシューティングについて

この章では、ブート時、およびインストール時に起こりうる問題の解決法を提供するトラブルシューティングについて説明します。また、Sun Control Station ソフトウェアのアップグレード時に AllStart 設定を維持する方法についても説明します。

Sun Fire V60x サーバーおよび Sun Fire V65x サーバーに必要なデバイスドライバ

Ethernet ドライバ

Sun Fire V60x サーバーと Sun Fire V65x サーバー上のギガビット Ethernet コントローラには、Intel PRO/1000 Network Interface (e1000) ドライバが必要です。

弊社では、このドライバのバージョン 4.4.19 以降のインストールを推奨しています。バージョン 4.4.19 は、弊社で互換性テストに使用された Ethernet ドライバであり、インストールに問題がなく、事前に設定されたテストケースでも正常に動作することが確認されています。

e1000 ソース tar ファイル内の Intel README ファイルに、このドライバの構築方法が記載されています。この情報は、次の URL から HTML フォーマットでオンライン利用できます。

<http://www.intel.com/support/network/adapter/1000/e1000.htm>

Intel ドライバをダウンロードするには、次のサポートサイトを利用してください。
http://appsrv.intel.com/scripts-df/support_intel.asp

- 「e1000 4.4.19」で検索すれば、ダウンロードする当該 tar ファイルが見つかります。

SCSI ドライバ

Sun Fire V60x サーバーおよび Sun Fire V65x サーバーは、最新のディストリビューションでのみサポートされる Ultra 320 SCSI コントローラを実装しています。

弊社認定のアドオンカードだけを使用するには、このドライバのバージョン 1.3.7 以降をインストールする必要があります。弊社認定の PCI-33 アドオンカードを使用する場合は、このドライバのバージョン 1.3.10 以降をインストールする必要があります。

バージョン 1.3.7 と 1.3.10 はともに、弊社で互換性テストに使用されており、インストールに問題がなく、事前に設定されたテストケースでもうまく動作することが確認されています。

これら最新の SCSI ドライバは、次の開発者向けサイトからダウンロードできます。
<http://people.freebsd.org/~gibbs/linux/>

Sun Control Station ソフトウェアのアップグレード方法と AllStart 設定の維持方法

最新バージョンへのアップグレードは、Sun Control Station ソフトウェアをアンインストールしてから実行する必要があります。AllStart モジュールには、プロファイルとクライアントの設定を維持できるよう、エクスポートとインポートのスクリプトが用意されています。ディストリビューションとペイロードの設定については、手動で作直す必要があります。

1. コントロールステーションサーバーに root ユーザーとしてログオンします。
2. AllStart エクスポートスクリプトを実行します。次を入力します。

```
# /scs/sbin/as_export.pl -t profiles -f /tmp/profiles.xml
# /scs/sbin/as_export.pl -t clients -f /tmp/clients.xml
```

3. アンインストールしてから、Sun Control Station ソフトウェアを再インストールします。

手順については、『Sun Control Station ソフトウェアのインストール』を参照してください。

4. ディストリビューションとペイロードを以前と同じ名前で追加します。

手順については、このマニュアルから関連する項を参照してください。

5. AllStart インポートスクリプトを実行します。次を入力します。

```
# /scs/sbin/as_import.pl -f profiles -f /tmp/profiles.xml
# /scs/sbin/as_import.pl -f clients -f /tmp/clients.xml
```

6. DHCP をオンにして、クライアントを有効化します。

インポートスクリプトとエクスポートスクリプトの詳細は、
/scs/share/man/man1 に保存されているマニュアルページを参照してください。

設定ファイルのカスタマイズ

設定ファイルはカスタマイズできます。

設定ファイルをカスタマイズする手順は、次のとおりです。

- カスタマイズを行うには、設定が上書きされないように Allstart モジュールに通知するコメント (Allstart: static) を、設定ファイルに追加します。

コメントは、行頭であれば、ファイルの任意の場所に挿入できます。いくつか例を示します。

```
/etc./exports => # Allstart:static
/etc/dhcpd.conf => # Allstart:static
/tftpboot/pxelinux.cfg/* => # Allstart:static
/scs/share/allstart/config/ks-*.cfg => # Allstart:static
/scs/share/allstart/config/ay-*.xml => <!-- # Allstart:static -->
```

AllStart で生成されたファイルに、<comment> <date> エントリが追加されました。

ほかのサービスと設定を共有するファイルについても、カスタマイズが可能です。設定ファイルの次の行の下に、カスタマイズする行を追加します。

```
Put custom additions below (Do not change/remove this line)
```

この構文では、次の 2 つの設定ファイルを使用できます。

```
/etc/dhcpd.conf
/etc/exports
```

トラブルシューティング

起動を完了して、クライアントが RPM とファイルを読み込んでいれば、インストールは適切に行われています。次に、ブート時とインストール時に起こりうる、よくある問題について説明します。

- 104 ページの「起動時の問題」
- 107 ページの「インストール時の問題」
- 112 ページの「一般的な問題点」

Terminal Windows

Terminal Windows は問題をデバッグする際に有効なツールです。

ビルド対象のクライアント上で **Ctrl-Alt-<Fx>** と押すと、いくつかの Terminal Windows を切り換えることができます。次のような Terminal Windows があります。

- **ctrl-alt-F1**: X11 のインストールに継続する前の初期コンソール
- **ctrl-alt-F2**: インストールカーネルが実行された場合にのみ使用可能になるシェルアクセス。autoyast ログファイルは `/var/log/YaST2/` にあります。
- **ctrl-alt-F3**: インストールメッセージ
- **ctrl-alt-F4**: カーネルメッセージ
- **ctrl-alt-F7**: X11 インストール画面 (X11 が実行中の場合)

起動時の問題

DHCP サーバーまたは PXE ブートでの問題

DHCP サーバーが動作していない、あるいは PXE 起動を制御しているファイルにエラーがある場合は、起動に失敗することがあります。

解決法

- そのようなケースでは、次のコマンドを実行してみてください。

```
run tftp localhost
```



```
tftp> get pxelinux.0
```

次のような応答を受け取るはずですが。

```
Received 10205 bytes in 0.1 seconds
```

● この操作が成功しない場合は、次の項目を確認してください。

1. tftp が有効化されていること。

```
chkconfig --list |grep tftp
```

2. xinetd が動作していること。

```
/etc/init.d/xinetd restart
```

3. /tftpboot/pxelinux.0 が存在し、パーミッション 644 に設定されていること。

4. /tftpboot で、パーミッション 755 に設定されていること。

5. dhcpd が起動され、/etc/dhcpd.conf ファイル内にクライアント MAC アドレスのエントリが存在すること。

6. /tftpboot/pxelinux.cfg/netboot-\$mac が存在すること。

7. netboot-\$mac にシンボリックリンクする /tftpboot/pxelinux.cfg ファイル内の hex ファイルが、クライアントの作成時に入力される hex 形式の IP アドレスになっていること。

pxelinux.0 のロード後にインストールプロセスがハングする

解決法

1. tftp デーモンに関するログを有効にします。
2. Sun Control Station サーバーの root ユーザーとして、/etc/xinetd.d/tftp ファイルを編集します。次のオプションを server_args 行に追加します。

```
server_args = -l -s /tftpboot
```

注 – Red Hat 7.3 の古いバージョンの tftp では、-l ではなく、-v オプションを使用する場合があります。これを確認するには、man ページで in.tftpd について調べてください。

3. 次に、クライアントをネットブートして、次のコマンドを実行します。

```
tail -f /var/log/messages
```

Control Station サーバーで、次のようなメッセージが表示されるはずです。

```
Mar  7 19:03:28 lx50 in.tftpd[31083]:sending pxelinux.0
Mar  7 19:03:28 lx50 in.tftpd[31084]:sending pxelinux.cfg/0A010A15
Mar  7 19:03:28 lx50 in.tftpd[31085]:sending JDSSUN-8.1-linux
Mar  7 19:03:29 lx50 in.tftpd[31086]:sending JDSSUN-8.1-initrd
```

送信対象が JDSSUN-8.1-linux だけであり、クライアントに接続されている USB デバイス (キーボードやマウスを含む) のあることがわかっている場合は、そのデバイスを外してからもう一度クライアントをネットブートしてみてください。

4. 考えられるもう一つの解決法は、BIOS で USB の旧式のサポートをオフにすることです。

クライアント構成で起こり得る問題

解決法

- クライアント構成で選択したブートインタフェースが、DHCP リクエストが送信される際に使用されるインタフェースと適合していることを確認します。

Terminal Windows で、Ctrl-Alt-F3 を押して、インストールメッセージを表示します。

カーネルのブート中にビルドプロセスがハングする

解決法

クライアントの「インストールのブート情報を構成」テーブルで、カーネルパラメータに次のような入力を追加します。

- 最初に、次を試してください。

```
apm=off acpi=off
```

- これで動作しなければ、failsafe モードに次のようなパラメータを入力します。

```
ide=nodma apm=off acpi=off vga=normal nosmp noapic
```

インストール時の問題

インストールが失敗するのは、多くの場合、システムが
/tftpboot/pxelinux.cfg/netboot-\$mac 内にリストされる ay-\$mac.xml
(Sun JDS の場合) または ks-\$mac.cfg (Red Hat の場合) を見つけられないためです。

また、システムがインストールに必要なハードウェアを見つけれない (たとえば、適切な SCSI ドライバが読み込めない) ために、この段階でインストールが失敗することもあります。

- NFS の使用時は、portmap および nfs サービスが起動されていることを確認してください。
- HTTP の使用時は、`http://x.x.x.x/allstart/config/` を参照してみてください。ここで、`<x.x.x.x>` は使用するクライアントの IP アドレスです。

ksconfig ファイル内にエラーがあれば、ここで問題が明らかになります。問題としては、無効なディスクパーティション設定や、無効なパッケージ設定などがあります。

- Sun JDS の場合は、次のファイル内のエラーを訂正します。

```
/scs/share/allstart/config/ay-$mac.xml
```

- Red Hat の場合は、次のファイル内のエラーを訂正します。

```
/scs/share/allstart/config/ks-$mac.cfg
```

起動を完了して、クライアントが RPM を読み込んでいれば、インストールは適切に行われています。

Solaris x86 ビルド時の問題

ビルドがハングし、コントロールステーションの /var/log/messages ファイルに次のようなメッセージが表示される場合は、クライアントシステムのビルドすべきファイルシステムのマウントに問題があります。

エラーメッセージ: Oct 25 20:12:21 machine1 rpc.mountd:authenticated mount request from 192.168.1.88:518 for
/scs/share/allstart/jumpstart/2/Solaris_9/Tools/Boot
(/scs/share/allstart/jumpstart) (このメッセージが 7 回繰り返して表示されます。)

解決法:

- NFS と競合する問題がほかにはないことを確認します。NFS サービスを再起動します。次を入力します。

```
% /etc/rc.d/init.d/nfs stop
% /etc/rc.d/init.d/nfslock stop
% /etc/rc.d/init.d/portmap stop
% /etc/rc.d/init.d/portmap start
% /etc/rc.d/init.d/nfslock start
% /etc/rc.d/init.d/nfs start
```

NFS ビルドのパフォーマンスを向上する

Solaris 9 x86 以外の対応 OS の NFS ビルドパフォーマンスを向上する手順は、次のとおりです。

1. 次のファイルを削除します。/etc/sysconfig/nfs
2. NFS を再起動します。次を入力します。
% /etc/rc.d/init.d/nfs restart

AllStart クライアントの再ビルド

クライアントをあるオペレーティングシステムから別のオペレーティングシステム向けに再ビルドする場合、ディスクのパーティションに関するエラーが発生することがあります。これを訂正するには、次のことを試してください。

1. クライアントシステムの電源を一度切断してからもう一度投入し、ハードリセットを行います。
その後、クライアントを再ブートして、そのクライアント上でもう一度ビルドプロセスを実行します。
2. それでもエラーが訂正されない場合は、ご使用のハードディスクドライブに低レベルのフォーマットを行います。
その後、クライアントを再ブートして、そのクライアント上でもう一度ビルドプロセスを実行します。

Sun JDS クライアントのビルド時にシリアルコンソールの出力が中断される

Sun JDS クライアントのビルドプロセスで、出力をシリアルコンソールにリダイレクトすることができます。その場合、ビルドプロセスの実行中にシリアルコンソールを切断しないでください。

ビルドプロセスの実行中に切断を行うと、ビルドが中断されたり、ビルドプロセスが異常終了する場合があります。

シリアルコンソールに接続し直すと、ビルドプロセスは継続して行われる場合もありますが、しない場合もあります。これは使用中のシリアルコンソールのソフトウェアによって左右されます。

Sun JDS クライアントでのカーネルパラメータ

Sun JDS クライアントを作成している場合、次のカーネルパラメータを指定する必要があります。

- Sun LX50 サーバーの場合：引数 `acpi=OFF` を追加します。

これは Advanced Configuration and Power Interface (ACPI) 機能をオフにします。

- ホワイトボックスサーバー全体の場合：引数 `apm=OFF` を追加します。

これは APM (Advanced Power Management) 機能をオフにします。

これらのパラメータが設定されていない場合は、設定されるようにクライアントを修正してください。88 ページの「クライアントの修正」を参照してください。

Sun JDS クライアントのビルド時の問題

フレームバッファの問題

エラーメッセージ：“Press <RETURN> to see the video modes available, <SPACE> to continue or wait 30 secs.”

解決法

このエラーメッセージが表示された場合は、選択しているフレームバッファが正しくありません。これではクライアントのビルド後に X11 が正しく開始されません。

このフレームバッファ値は、このクライアントのプロファイルの X11 構成オプションに設定された、解像度と色深度の設定値に基づいています。「X11 設定を自動的に検出しない」を選択している場合、デフォルト値は「1024 x 768 x 16」です。

必要に応じて、このパラメータはクライアントの「インストールのブート情報を構成」画面で上書きできます。クライアントのカーネルパラメータに次のような行を追加します。

フレームバッファがインストールされていない場合

```
vga=normal
```

フレームバッファを別のモードに設定します。上記のプロンプトで、好みのモードでスキャンを行い、対応する 16 進値をここに入力します。たとえば、次のように入力します。

```
vga=0x31e
```

Control Station の UI によってこのパラメータを変更したくない場合は、ファイル `/tftpbboot/pxelinux.cfg/netboot-*` を編集します。ここで、* は MAC アドレスまたは `default-[name]` で、これはクライアントのタイプによって決まります。このファイルの `vga=` パラメータを修正します。

注 – ペイロード、プロファイル、またはクライアントを修正する場合は、Control Station の UI によってこれらの変更を上書きします。

すでにユニットをビルド済みであるにもかかわらずこのエラーメッセージが表示され、表示されないようにしたい場合は、ファイル `/boot/grub/menu.lst` を編集します。vga= パラメータを上記のように変更します

詳細は、次の Web サイトにアクセスしてください。

<http://www.tldp.org/HOWTO/Framebuffer-HOWTO.html>

X11 の構成上の問題

Sun JDS クライアント上でのビルドプロセスの完了後に X11 が起動しない。

解決法

フレームバッファが正しく機能していることを確認します。フレームバッファの問題を訂正するのが、X11 が正しく動作していることを確認する最も手取り早い方法です。

109 ページの「フレームバッファの問題」を参照してください。

Red Hat クライアントのビルド時の問題

Red Hat 2.1 のビルド中に Anaconda エラーメッセージが表示される

Red Hat 2.1 を Red Hat 2.1 サーバーからビルドする場合、ビルド中に次のような Red Hat の Anaconda エラーメッセージが表示されることがあります。

```
Traceback (innermost last)
File "/usr/bin/anaconda", line 598, in instClass.setInstallData(id)
File "/usr/src/build/110263-
i386/install/usr/lib/anaconda/Kickstart.py"
line 839 in setInstallData
File "/usr/src/build/110263-
i386/install/usr/lib/anaconda/Kickstart.py"
line 556, in readKickstart
```

解決法

これを解決するには、次のいずれかを行います。

- 1) クライアントで実行している Red Hat 2.1 のアップデートバージョンを Sun Control Station サーバー上でも実行します。

たとえば、Sun Control Station サーバーで Red Hat 2.1u4 を実行している場合、Red Hat 2.1u3 ではなくこのバージョンをクライアントにインストールします。

- 2) HTTP ではなく NFS でクライアントをビルドします。

クライアントの最初の画面で、「インストールのタイプ」ドロップダウンメニューから「nfs」を選択します。

Sun Fire V20z を RHEL3.0 (64 ビット) でビルドすると AllStart がハングする

Sun Fire v20z ハードウェア上で RHEL3.0 AMD 64 ビットバージョンのクライアントをビルド中に scsi mptscsih ドライバをインストールすると、AllStart がハングすることがあります。

解決法

最新の RHEL3.0 アップデートバージョンをロードします。RHEL3.0u3 AMD 64 ビットを検証して、Sun Fire v20z ハードウェアにインストールします。

一般的な問題点

RAID デバイス上の root (/) および boot (/boot) パーティションの作成時に判明している制限事項

AllStart モジュールの実行する RAID 設定検証の内容は、ごく限定的なものです。AllStart プロファイルから正常に作成した RAID 設定は、必ずしも SuSE などの OS ベンダーによってサポートされているとは限りません。

解決法

特定の情報については、オペレーティングシステムソフトウェアに付属するベンダー マニュアルを参照してください。